14
66

渡邊重綱著

征清紀行

白關書屋藏

特20
347

征清紀行緒言

余少年より詩を賦する事を好み諸先生に就て學ひたり熟考すれは詩は元來支那の雅言にして我國には和歌なるものあり今や征清の日敵國の風を學ふも不祥なりとをもひ最初征清軍の戰勝や諸友人の出征を送るとて拙なきふしをれを讀みしなり然るにはからずも出征の命を奉し朝鮮國清國に從軍せり他國の事なれは眼に視耳に聽くもの皆めつらしく殊に戰場の景況なれは小々筆に盡しかたく去りなから老の身なれは萬事忘れ易く一朝歸國の日諸友人ゐ訪問せらるゝまにゝ答のたすけにもせはやと筆をとりてものしぬ此記事は僅に朝鮮國清國の一部分にて世を益する程の物にあらず猶更日月も短かき事なれは定めてあやまり多からん我と一行の諸君は勿論其他の人々指摘して示されなは幸甚

明治二十八年七月

著者識

明治

或日白關渡邊大人こを見てともたらしたまへるゐ是征清紀行になんありけるゐはそも〳〵我日本と支那とは長く久しく睦みあひたりしもをもはすはからすこたひ朝鮮に事起りつひは支那にむかひ戰ふゐとゝなり海陸軍の火筒の音世ゐ響きわたり我大み稜威なる此第二師團繰出されたるに大人は軍醫の任務を帶ひたまひ後備軍にくはゝり雄々しくも龍の駒に鞭うち此仙臺出陣の日より道すがらはさらにもいはす彼北支那滿州地進軍の道々本務のいとまのまにま其地の寒暖變更より全般の風俗にいたるまて事の大となく小となくよくつはらにものせられたるは後々立出ん人のためにも櫻木に物せられたしとゐゝらいふ人のあれはとて左なさんにこのはしに一筆と乞れせちにいなめはせちに乞れれはしけれとゝわきらけくをさまるといふはたとせあまり八とせの冬みしかき筆の氷かちなる師走はかり埋火のもとゐ不二の舍のあるし雲外しる寸

征清紀行目錄

第壹章

發端朝鮮國東學黨蜂起の概略より日清戰爭となり尋て第二師團豫備後備隊出發廣島到着迄の記事

第二章

宇品港解纜航海朝鮮國大同江口漁隱洞到着綠沙浦上陸行軍黃州鎭宿舍平壤府安州城に至るの記事

第三章

安州以北の郊村及ひ東林鎭西林鎭經過義州府着營尋て鴨綠江堅氷騎馬行清國九連城安東縣に至るの記事

第四章

安東縣出發大東溝到着守備隊附勤務及ひ地方景況清國人病者施治に係るの記事

第五章　大東溝出發前進龍王廟經過土城子到着守備隊附勤務二月一日酷寒大風雪凍傷患者發生等に係るの記事
第六章　同上守備隊勤務中其地人民兵乱後困難の景況及ひ諸方の書簡贈答等に係るの記事
第七章　同上勤務中大孤山港に至り地方并に人民視察の記事及ひ龍王廟方面五道橋架設其他の記事
第八章　土城子出發前進途上の見聞及ひ岫巖到着以後城中市街乱後の景況視察に係るの記事
第九章　岫巖守備隊勤務中地方一般の景況并に休戰條約以後彼我人民の挙動及ひ日清講和結了祝宴に係るの記事
第十章　岫巖出發大孤山に至り待命滞在其他の景況及ひ悪疫大流行歸朝航海大坂櫻島上陸尋て瀌車行仙臺到着迄の記事

征清紀行

仙臺　渡邊重綱著

第一章

夫お明治廿七年六月の初めつかた朝鮮國に乱起れり其は東學黨と稱する草賊共王家の奸佞臣を排斥して人民を安するとの口實を以て黨を結び此所彼所に屯集し其勢頗猛烈あゞ王家鎮撫の力に乏しく清國に向て援助を乞ふ清國は兼て朝鮮を屬國同樣に視てありし故に兵隊若干を派出して鎮撫の勞を取れり朝鮮去る明治十七年丙乱ありし時我國と清國と共に朝鮮を獨立國とし協同助力する事を條約せり故を以て我國又た若干の兵を派遣せり然るに清國は我兵の撤去を申越せり是は朝鮮は自己の屬國なれは他の干渉ゝ及はすとの意なり我公使又之を排斥す朝鮮は從來小弱の國なれは孰れを是とするの決斷なし唯両端を持するのみ時日を移す間に朝鮮國兵我兵に向て砲發の暴

狀に及ひし故我兵も亦之を逆擊せり尋て清兵と我兵と紛擾を生し七月末つかた成歡牙山に戰端を開き大に清兵を破り京城に凱旋す此報一夕我國に達するや朝野共清國の驕慢無禮條約を無視するを怒る八月一日清國征伐の　勅詔を發せらる陸軍は第五師團野津陸軍中將海軍は樺山海軍中將大に兵を部署して出發せられたり數日にして朝鮮京城に着す此時清兵は過る成歡牙山の戰に敗北して平壤に退去し更ゐ自國の援兵と相併せて龍城す我兵之を聞て何ろ猶豫すへき九月十四日十五日兩日の進擊に平壤城を攻落し敵將を生擒し兵器の分捕莫大なりと然して海上には數艘の軍艦相連ねて海戰を開き敵艦を打擊したり此捷日本に達す朝野欣躍手の舞足の踏む所を知らさるか如し清兵訓練の拙なる爭てか我三十年の精鋭兵に及ぶへき海陸悉皆敗衂せり歎賞のあまり文明利器と云ふ文字を題としてよみぬ

日の本のふみあきらけきつるきもて

醜のしゐ草薙つくしてん

神風にくろがね艦をよそはひて

あと國の海ふみつくしてん

斯て清兵は朝鮮國境義州を經て盛京省九連城安東縣地方に遁走す我兵追擊益急なり此時に方り六師の兵我もゝゝと出征を希望す仙臺第二師團に於ても九月二十五日第一充員令發せらる我本年六十才に至るも猶後備年限中なるをもて召集令を辱ふす同日午後三時躍躍岡歩兵第四聯隊兵營に出頃す歩兵第四聯隊補充大隊醫官命せらる

此度は甲斐〳〵しくも大君の

御書かしこみ出る老の身

舊友柳野陸軍一等軍醫(直)は越後長岡人なり我と親しき人にて又和歌を好む召集に應して來る談話數刻の後よみて示めす

老の友小手腦あてに身をかため

霰降る野を踏むそ嬉しき

清兵九連城の守備も亦我兵の攻撃に堪へずして大東溝或は大孤山方向て走る追撃到處占領すとの電報あり愉快なから又我兵の刻苦も察しられて

神風は海路のみかは紅葉を
みなもろみしの山に吹しく

舊同僚の軍隊に從ひて朝鮮國清國ゑ出征したる人々の狀態をれもひやられてよみてれくりぬ

朝な夕な海路はるけき友とちを
れもふ心をしるやしらすや

仙臺第二師團諸隊の召集も完了して更に後備軍召集令を十月六日に發せらる我等同二十七日後備歩兵第三聯隊第一大隊附を命せらる彼是する内二十九日は第二師團出發となる軍隊のいさみ立實に目覺し

又市民の歡喜大方ならす各戸國旗を掲け種々の裝飾をなして相送れり仙臺停車場は狹ぎを以て名取郡長町停車場を取設け軍隊を送る所とせらる佐久間師團長閣下石坂軍醫長によみて進むる歌

みと國にほまれを揚くる端ならん
名取の里に首途する君

指折りて今よりまたんこと國よ
いさはし立てかへるその日を

其他の人々相つとひて出發せらるゝ事のうら山しくまた留守する身の心苦しくれもひて

友とちの首途見送るこゝろ根は
いかゐくるしきものとそれもへ

殘り居て菊の花守る老か身の
よろひの袖はうゆにぬれつゝ

十一月十六日我後備第三聯隊は第一軍に屬し朝鮮國を經て清國に發向すへきの命を受けたり皆々いさみ立ち準備に取り掛りぬ

思ひきや六十路の山を嬉しくも
いくさの衣着て越んとは

ますら男とならひてはゐをとることは
君と親とのめぐみなりけり

十二月四日出發せるる聯隊將校姓名

後備歩兵第三聯隊長　陸軍歩兵大佐　友田美喬
同　聯隊副官　陸軍歩兵大尉　菅波允升
同　聯隊旗手　陸軍歩兵少尉　齋藤音作
同　第一大隊長　陸軍歩兵少佐　井上亨
同　同副官　陸軍歩兵中尉　山口貴眞
同　醫官　陸軍一等軍醫　渡邊重綱

同　陸軍三等軍醫　佐藤哲策
同　第一大隊計官　陸軍三等軍吏　木内義敬
同　第一中隊長　陸軍歩兵大尉　岸和田清定
同　小隊長　陸軍歩兵中尉　山口居敬
同　第二中隊長　陸軍歩兵大尉　野村道建
同　小隊長　陸軍歩兵少尉　黒澤主一郎
同　第三中隊長　陸軍歩兵大尉　今村四郎
同　小隊長　陸軍歩兵少尉　穴澤宣定
同　第四中隊長心得　陸軍歩兵中尉　藤井幸槌
同　小隊長　陸軍歩兵中尉　井上伊太郎
同　第二大隊長心得　陸軍歩兵大尉　柳生房義
同　副官　陸軍歩兵中尉　辰木兼次郎
同　醫官　陸軍一等軍醫　樋口光明

同　陸軍三等軍醫　右田一
同　計官　陸軍三等軍吏　倉林鑑次郎
同　第五中隊長　陸軍歩兵大尉　杉村愿簡
同　小隊長　陸軍歩兵少尉　熊谷直敏
同　第六中隊長　陸軍歩兵大尉　上田省治
同　小隊長　陸軍歩兵少尉　佐藤林治
同　第七中隊長　陸軍歩兵大尉　小藤亨三
同　小隊長　陸軍歩兵少尉　平山治久
同　第八中隊長　陸軍歩兵大尉　大川清成
同　同小隊長　陸軍歩兵少尉　神保文治

此外特務曹長八名下士百三十九名兵卒馬卒職工等總計一千六百九十七名右仙臺停車場より乘車する事となる此日我親戚舊友は勿論市中人民より賑々敷送られぬ

旅衣いくさ衣に脫かへて
　けふ宮城野の宿を立ちぬる
友とちをたくるきのふに引かへて
　送らるゝ身となるそうれしき

出發人員多數なるをもて午前午後翌五日と三回に分ちぬ我は四日午後九時出發す沿道の宿驛にて歡迎する頗る丁寧なり勝栗、密柑、熟柿、煎餅、酒肴或は手巾等贈られ篝火を焚き大小旗を風に飄し萬歲々々の聲なりもやまず祝せらる

道の邊に糧餉をくる人々は
　王の師を迎ふなりけり

白河は我故郷なるか出發の事は兼て通知し置たれはいかゞならんとおもへ〻に其刻限は翌曉二時過きなるに數多の人々出迎へ其中に名を高く呼ふあり是れ親類なるべし答ふる間もなく早くも濠苗の聲と

なりぬ

窓明て見かはす顔も一と聲の

笛と過き行く夜半の故郷

滊車は走り出したり過き去りし親達の御墓は關川寺月心院と云ふ所にあり滊車の中より拜しぬ月も明かに寺の樹林を照らせり

走り行く車に起て關寺の

森の月顔ふしをかみつゝ

幾程もなく夜明けたり那須の原道行過て午後一時頃東京に着きぬ午飯を喫し暫時休憩して發す品川横濱を經て足柄山北の驛に至れは月中天に登りて清らかなり此所の郡長は心ある人にて我一行に麥湯菓子など進め又紙片に敷しまの大和心を人とはゝ朝日ににほふ山櫻花」の歌を記し數枚贈らる我是を見て感服し何か返しもかなとれもへたり先つ謝禮し尋て足柄山は其昔新羅三郎の笙を吹つる所なるか何處

なりやと問けれは向ひに見ゆる少し平かなる所なりと答へけり幸に月も明らかなるに山風さら〳〵と吹けれは

笙の音のそれかあらぬかとからしに

月影さゆるあしからの山

右即吟にてふつゝかなから贈られたる紙片の裏に鉛筆もて記し進めたり斯て御殿場をすき駿河路にさしかゝれは夜も更け行きて月影は富士の高根に見えかくれになり殘り惜しくれもひて

起出てなかめんとれもふ月影の

早くも富士のねにそ入りぬる

宇津の山大井川小夜の中山行過きて參州矢矧の橋に至りぬ是ゐそ太閤秀吉公幼童の折橋上に轉寐せし所なるも老年朝鮮に兵を出して國威を示されたれ我又今日朝鮮行の命を奉しはからずも經過せる豈感慨なからんや

こまへゆく身は寒からす童子の
矢はきのはしの夜半をれもへは

斯くて程なく草津大津に至り琵琶湖の片邊を渡りぬ十とせあまりの昔両度も渡りけるに其時とかはり何となく波もあらゝ敷見ゆたり

れたやかに越えしきのふの湖水も
けふは波風立ちさはきつゝ

二晝夜の車行よて勞れぬれは唯打臥して過きけるに早くも七日の朝またき安藝の廣島に着けり

ふたみやゑ浪華廣島一と線に
旅寐の夢を敍する瀛車

八日午前大本營野戰衛生長官部に出頭して石黒總監閣下落合醫正に面謁し公私共に細々承りぬ落合醫正の言ふに貴君老年にて酷寒中の征役覺束なし此地に留守する宜しからん熟考あるへしと取あへす讀

みて呈す

諸人と同しあゆみはならすとも
國ゐむくゆる心わくれし

午後再たひ野戰衛生長官部に出頭す石黒閣下は八九月中朝鮮及清國巡回せし時の和歌三首を示さる我も亦出發の歌なと記して見せ侍りたり其より退出して第二師團諸宿營を訪問し佐久間師團長閣下石坂軍醫長其他面謁せり

九日將校一同　天顔ゐ咫尺したてまつり又聯隊旗を賜はりたる奉迎式を東練兵所にて執行せらるに依り出塲せり

御軍の首途に賜ふ御旗ゑそ
我一とつらの光りなりけれ

第二章

十日宇品港に至り鹿兒船丸に上船せり我聯隊の内第一中隊より第七中隊まで同船し更ょ第五師團長奥陸軍中將閣下吉澤一等監督石田步兵少尉等便乘となる然して第二大隊本部と第八中隊は別に攝州丸に乘込たり此日は船中に休憩して翌十一日午前五時發す天色清朗飄然西に向ふ

目さましやいくさみ船のともつなを
　　曉かけてときはなしつゝ

去程に周防洋や四國の間を過きて午後六時赤馬關に至る此夜は碇泊し十二日曉外海に出て玄海洋となる船体動搖して乘客過半うちなやみ我も同しく打臥せり船手の者對馬の浦見にけるよしを告く十三日曉朝鮮海に臨み大小島の間を彼是と過き行ぬ起出て左右の島山なかむれは我國と變りて兀山のみ多く人の住むとも見えす梶師に何處そと問けれは仁川洋なりと答ふ

こまの海ははるけき事とれもひしに
　　わつか二た夜の夢にうゐりける

十四日朝より西北風吹來り海面波高く船の運ひも怠り既に漁隱洞近くなりたるにます〳〵風すさみて如何ともすへきやうなく船を戻して大青島と云ふ所にしばし碇をれろしぬ少壯者はいたく怒りのゝしり何故戻せるやなとさわきけるも船長中々にうけかはす

和田津海のすさむゆふべは武士の
　　たけきこゝろもしはしなゐめよ

然るゐ風の強きに雪さへ交り面を向くへき樣もなく翌十五日になりて室の小窓に呼氣の氷結するすさましくして寒暖計華氏十八度に降りぬ

風をいたみしらぬ岩間ょ浮寐する
　　一と夜は千夜のこゝちゐそすれ

十六日午後に至り風も歇み船を進めて大同江口漁隱洞に入りぬ再たひ風雪となり皆々室中に入り窓より左右の山を詠むれは白妙の雪と見る間に早くも吹散され元の元山となる其中に高麗人の白ふ衣着て往來する樣夏のけしきとうたかはる國のならはしなれと怪しむにいたらす

ふゆかれて吹風さゆる山のはに
白妙ころも着たる高麗人

二十日綠沙浦に着す漁隱洞より五里程の上流なり翌日は上陸せんとすれもへかへせば字品を出てより高麗の浦に十日餘船宿りしたれは何となく殘り惜しくもれもはゆる

大ふねをすつ〻るも惜しふまの土
ふむも嬉しくれもはゆるかな

二十一日午前九時上陸す朝鮮人役夫數多群居せり衣服は一樣に白綿布なり青色者貳人あり是は役夫長なりとそ官吏も亦着色衣を服す都て烟管貳尺五寸許を携へ或は腰に差し火打石綿火の袋をまへに垂れ下けたり日本人ゐ對し卷烟草を乞ひてうるさし久々にて馬に鞍置せ跨りぬ友田聯隊長菅波副官と轡を連ねて山の頂野邊の細道踏行も猶曠野のみ多し

遠近の曠野は蟲の聲もなし
轡のひゝきもろともに聞く

午後に至りて少しく田圃の畔をたとりけるに人里も此處彼處に見えけり夕暮に黃州鎭に着きぬ行程六里余なり朝鮮國里程は我國の四丁餘に當る故に此度各兵站部にて十里を縮めて一里と訂正す大約我國の四十丁强に當るなり此州と稱するは朝鮮國制にては一方面の首部にして我國今日の縣中古の一領地頭の居城に似たり黃州は人家八百戶兵馬節度使の所鎭にして黃海全道の陸軍を統轄す城は天柱山の西

隅にあり東は德月山を控ゆ松樹繁茂し高さ二百米突もあらん西は赤壁江に臨み周回約するに三千米突四隅に門を設け城外遶らすに幅七乃至十米突深四乃至六米突の空濠を以てす城門は都て樓造りなり城內殿閣數棟瓦石造にして各門石壇數多あり門扉及柱には五字七字の對語を記載し前楣に貴州鎭と記する展額あり聯隊長は正殿に宿泊す節度使李容觀此に赴任せり薄暮美麗なる官服を着け屬官十名餘率來り名刺を出し聯隊長副官我等を訪問せり

兵站部は左方の別殿にて頗る廣濶なり司令官森戸步兵少佐事務を整理し我一行に對し正宗酒牛肉鑵詰醬油炭薪など添て配布せられ丁寧なる待遇なり我人仙臺を出る時戰地に至りなは握飯や梅干などゝ覺悟せしに案外の事にて驚きたり

れもひきや野にふし山に宿る身に
にくのあつものたくるゝとは

二十二日午前八時出發す道傍に石碑數多建ならひたり何某善政碑何某頌德碑或は不忘碑等なり美麗なる雨覆を造るあり石碑のみなるもあり道路は昨日の山坂に引替大道なり多分平坦にして我國の官道の如し左右の田圃は皆唐黍粟稗等を植付僅に陸稻を交ゆ其刈株や枯幹なと現に殘れり此國の常食は唐黍を粉にして團子に造り粟或は小豆粥などに交ゆるなりと數所の村落を經過して午後四時中和府に着す行程五里十九丁

中和府は一個の部落にして人家大約六百戸之を主宰する官吏を都護府使といふ其官衙は府の中央にして大なる邸第なり今日は兵站部となり司令官坂井步兵大尉任務せり我一行兵站部內の一室ふ宿泊し土地の狀態や野戰隊の景況など談話して打臥ぬ

廿三日午前九時出發す前日と等しき大道をたどりて遙に大同江流ふ沿へつゝ平壤に近つきぬ此所も亦頌德碑善政碑不忘碑立ならふ黃州

の比にあらす一層宏壯なり既に渡口に至る地名を船橋里（せんきやうり）といふ即是九月十五日平壤攻擊の際第五師團第十一聯隊將校下士卒彈丸雨飛の中に奮戰せし所なり沿岸の大小樹なと枝折れ又は樹幹に彈丸數多打込たる痕を見る善政碑石半部摧破するもなり空湿高壘數百間依然たり江面は水流沙洲相半す大約六百米突ならん悉皆氷結して車馬通行自由なり馬蹄に任せてわたりぬれもひ出せは攻擊の將士は此大川を競渡奮戰せしふ唯やすゝと騎馬にてわたるとは我なから耻かしくもれもひぬ

川波をかちわたりせし人ならて
氷ふみ行く身ふそつらけれ

聞說大同江は幅六百米突深さ三米突乃至九米突（渡船十餘隻潮水の干滿は平壤より上流二里に及ふ大潮には殆三里冬季は平壤の下流四里迄一面氷結し人馬通行すといふ）

江上わたりつくせば直に平壤府なり（箕城又險城といふ）沿岸石壇高く築立前門を大同門と云ふ高さ五丈餘の樓門なり人家大約五千戸平安道の首府ふして百貨輻輳運輸の便あり古來北門の鎭ふして監察使之を治す府城は石造高さ十米突厚さ基脚ふ於て六七米突頂上三米突五大門及四個の暗門を有す人家は中部以南は連擔瓦屋其半を占む監營府廳（兵站部）親軍西營（兵站病院）其他官衙は多分軍隊宿舍等となれと翌二十四日滯在となりて府城內を巡見す城の東端石墻を傳はりて彼練光亭ふ登り大同江及東南の平原十里を一望す天下第一の江山と稱せしも誣言ならす其より兵站病院に至り三輪三等軍醫（孫三郎）に面會す舊を話し新を談す平壤戰後の遺棄物彈丸破片古矢茶碗其外贈られたり其より關帝廟を見て西北牡丹臺に至り更に松山箕子廟等を一見す高低出沒其宜しきを得たり斯る山河連帶の堅城を支持する能はさるは戰機の巧拙はさし置先以人和を得さるなるへし敗兵の死屍を埋

たる所二三ヶ所を過き西方小高き所萬壽臺と云ふ我將校戰死者の墓あり其姓名を木標に記し列序せらる

なきからをれさめまつりし山の上の
草葉のつゆに袖ぬらしけり

此人々其身は他國の露と散りぬるも其名は後の世まて高き譽れとなり華々しき事になん

武士の花とこそみれ城山の
いたゝきに置く今朝のつゆ露

其より中央の街巷を此處彼處と徘徊せしに兵乱後四方に遁逃せしや空屋のみにて中よは犬や牛馬あとふし居り又は兵火に罹りしもあり見るもあはれにいたはしかりきれもふに人の見えさる家屋は十の六七ならむか然して歸り來らさるはいまた全き平和と知らすして恐れ懼(はゞか)りてなりと

やさけびの聲はきのふとすきつるも
むなしきいへのなとか多かる

其より西南の市街に至りけるに佗しき民家の間に又々兵營あり石墻高く築きたり既に日も暮れけれは宿舍に歸りぬ

二十五日午前八時出發す市街を穿ちて北門に向ふ七星門と云ふ前門と同しく高樓にして扉は鐵板なり出口頗る險岨にして馬蹄困難なり曲折して漸く大道に出たり右手の山は兎山にて箕子廟なり路傍石碑を建て曰大小人員過此者必可下馬其より平野の間を北に向て行く事二里はかり道路の傍に白き物あり能見れは左の手なり馬丁ゐ命して棒ゐて堀りけれは清國敗兵の死体なり腹掛のみにて靴の破れたるを穿てり十歩程行くに細き流れに屍体の水にひたりしあり其より右方の小丘に登り見れは憐むべし其處彼處ゐ幾個となく屍体の散り敗たる有樣實に目もあてられず

野も山もみなしかはねと聞つれど
けふ見る事とれもはさりけり

唐詩に「髑顱悉是長城卒日暮沙場飛作灰」即是秦時の事に作りぬるも其時を憚りて寓意の作なり歴史なと考按するに定めて突厥と稱する北夷を征する時の狀況ならん

吹すさふ風に土砂飛散りて
あらはれいつるされかふべかな

「可憐無定河邊骨。猶是深閨夢裡人」此詩は匈奴を征するの作なるも亦漢武の時代に意を寓するならん

なきからは野澤の水にしつむとも
夜毎の閨の夢に入るらん

斯る有樣はいかにも見くるしき事そと野人に問けるゐ最初日本軍隊より人夫及朝鮮人に命して仮埋せしに追々心わしき者共死者の衣服

を剝取らんとて夜間堀り出したるを犬や鳥なとのくはひ出しけるとと云ふれもへは昨日平壤の城山にて日本軍隊戰死者埋葬場を拜しけるに此地死体累々たるも鳥獸にゆたねてれさむる人のなきとは餘り情なき事にこそ

かれくさのーかはねれはふあたし野を
とふらふ人のなきろかなしき

此道路は多分平坦にて幅も五米突内外土質は鹵砂疎鬆紅色を含む午後四時頃順安に着す五里二十四丁なり此夜宿舍の老父に野外の死体の事なと問けるに是は清兵平壤の敗北より順安に向て走らんとー其折日本兵の元山津より後れ來る多人數に逢て逃路ゐ苦しみ四方に狼狽し野山前後の方向も辨せず散乱せるを日本兵に擊れたるなり尤も此山陰に無數の死体あり今に誰も整理するなしとそ

二十六日午前九時出發す此日天色曇り雪摸樣なり同ー道筋を北向し

て午後五時蕭川に着す人家三百戸余北に丘岡を負ひ南お耕地あり行程六里四丁なり昨夜迄は將校下士卒民家に宿營せーに此驛は將卒一般空家に莚を張り藁を敷きたり炊きも軍隊にて執行す故に前日に比すれは飲食共よ不充分なり初めて戰地の狀況となれり

二十七日前夜來雪降りて朝の寒暖計華氏十五度を示せり午前八時出發す道路高低殊に降雪は氷となり鏡のごとし馬匹も歩行に惱み轉ふ事數回頗る時刻を費し午後五時に至りて險岨なる山坂を過行ぬ夕風はけしく吹き來り面を吹くへくもあらず馬を下りて徒歩せり

見渡せはひつめ立べき道もなし
吹雪にむせぶゆふくれの山

既にして日も暮れぬ只北に向ひてたとりける時に一人の兵卒來り我等の後れたるにより道しるへとして來れりといふ地獄にて佛に逢ひたる心地して夜八時安州鎮に着す聯隊長は疾に着きて我をくれたるを案しられたるよし取敢す酒杯を賜はり共に道路の困苦を話しぬ此夜寒暖計華氏十三度に降りたり

安州鎮は內外二城に分つ北を內城南を外城とす各四門を設く內は官衙外は民家なり前門清觀後門鎮北と號する扁額を樓上に掲く城は石造にて周回四千米突壁の高さ四米突厚さ九十珊知米突長方形の射眼を穿つ市街人家は五六百戸稍潤色あり蕭川より里程七里餘

第三章

二十八日早朝出發す此日乘馬疲勞せしを以て徒歩して鎮北門を出て田野の間を行く事十丁餘に大河あり清川江と云ふ二流に分れ沙洲を夾む幅三百米突餘南を本流北を支流とす悉皆氷結す更に田野の間を過きて津頭といふ村に至りぬ此村過る平壤の戰に敗れたる清兵退去の際放火せしとて二百戸餘の民家僅四五戸を殘して焦土となり實に

憐むへし今まて經過せし市町村多少の兵火に罹りしも斯る慘狀はあらさりし

村里は殘るくまなくやきうせて
雉子鳴く野となりにけるかな

村を出れば直に大寧江なり川幅大約三百米突餘徒歩して岸に上る民家四五戸ある所を右に就きて小高き岡に登る津頭村大寧江を瞰下し行人都て休憩する所なりとそ然るに其傍に杭木數本遺棄せるを寵の樣なる物數個あり是を土人に問ふに清兵敗走の際此處に露營して我兵の追擊を要し守備をなしたるなりと仍て知る川向の津頭村を燒き拂ひしは射界を作り且つ我兵を宿泊なさしめさる軍略上の考なりしならん斯くて長き山道を迂回して午後五時嘉山着行程五里半

嘉山郡は人家貳百五十戸と云ふも頗る寒邨なり東西北三面山を負ひ人民は多分遁走して空屋なり將校下士卒悉皆空家に生薪をたきて夜

を明したり

二十九日前途は險岨且つ里程も遠しと聞き早朝に出發せしに果して驛端より高低出沒し殊に大小石磽确たり其間より出る泉は氷となり雪を交へて進み兼けれは暫時馬を下りて傍の丘岡に休らへ旭日の升るを待けり

雪氷みなきる山に駒留て
のほる朝日の影を待かな

斯て山野の間或は田圃の畔を出沒して午後五時定州鎭に着きぬ城は石造にして周圍六千米突餘五門あり四邊及西南隅に開く前門定南獨鎭衙門の大額を掲く人家三百戸城の内外に散布す安州と稍似たり嘉山より六里

三十日午前七時出發す山間を迂回して行ける田圃も少なく小さなる流に沿へ正北に向て歩行せり寒氣漸加はり午後六時宣川府に着す行

程七里三十三丁餘

三十一日滯留休憩を命せらる此地は城にあらざるも衙門殿閣等安州定州に略同し人家四百戸餘あり舊同僚石田一等軍醫(厚哉)後備歩兵第六聯隊二大隊醫官として守備勤務たり久々にて面會す恰もよし此日は歳除なれは同氏自から松餅其他裝はれたり酒酌かはし舊き新しき話相交へ殆半日間のうさをはらし歌一首よみて示せり

ながらへてまた此年をこと國の
いくさの旅にむかいぬるかな

此地と上田歩兵大尉兵站司令官たり手はしめの事なれば中々多忙なり兵站部は宣川都護府に設置す官衙の前に門松日章旗等都て內地に擬して粧飾せり我等に酒肴なと贈らる同行今村大尉穴澤少尉と共に酒酌かはし鄕里歳除の事なとよもすからはなしあへり

明治二十八年一月一日晴

歳旦天色晴朗なるも外國行軍の身なれは祝ふ心もはかゝゝしからず午前七時打立ぬ寒氣一層烈敷華氏十度を示せり相替らす山坂原野を經て十二時頃東林鎭に至る山間の一城閣にして西北は山に據り古松繁茂す石墻高さ五六米突峯より東に廻り南は前門樓臺高く西にも樓門聳ゆ周圍二千米突もあらん所々潰崩せり城內殿堂は悉皆破壞して枯草茫々城門前も亦人家十餘戸のみ此所を過きて西方半里はかり南北より突出したる小高き山あり北は東林南は左峴と稱す其間に石壁築立て關門を設置す鎭西關又(左峴關)と云ふ樓上に鎭西關の大額を掲く高さ三四丈もあらん門扉は鐵板を張り左右に開閉す尤も堅牢なり東を表とす西は裏にて樓に登る石壇あり平壤の大同門に劣らさる構造なり關を出て壹里はかり平遠なり田圃の間を經過して車輦館に至る人家三百戸餘村の北端に美麗なる殿堂あり門前の石標に大小人員過之者必可下馬と記せり余馬を下りて至り見るに正殿に明倫堂と云

ふ額あり右傍の小家に老父の留守するを見る文字を以て問ひは大聖孔子なりと答ふ前扉を開きてよと云ければ縣令の命あらされは開閉をらすと云ふ故に唯禮拜して去る更に山谷の間を行く事一里はかりにして白雲山廣大山の間にも亦城あり西林鎮と云ふ煉瓦壁を遶し周圍大約四千米突東南前門を設け其上に樓を架す承陽樓の大額を掲く城内民家三四十戸もあらん後門即ち北門も同しく堅牢なる樓を架す鎮朔鎗の大額を掲く西方よも小門あり東林鎮に比すれは石墻及門扉の構造一層嚴重なり然れとも亦一長物にして用ゆるに足らす都て是豊太閤征韓の時に築きたるなるか又明軍防禦の爲めにせしなるか分明ならす中古の朝鮮中々侮るへからす然して今日の國力政体斯のことく委靡せるは抑また何の故そ

新玉の年のはじめにむちうちて
雄々しく越ゆるふるさの城山

城門を出て北に向て行く三里餘黄昏に及ふ頃途上左右に古木數株植立たるあり既に半は枯朽せり之を土人お問ふ此地は當時有名なる紅楓の勝地と云ふ然るに山澤滿目氷雪にて處々僅に土地を見るのみ又賞するに由なし國の衰微もしられたり

もみち葉も今はあとなく散り果て
見るかけもなき山里の暮

斯くて七八丁はかりにて良策館に着けり人家八十戸宣川より八里半餘行軍中の長程なり

一月二日

午前八時出發す道路高低數所あり徒歩する事四里半はかり午後一時頃所申館お着せり此驛至て小邨お人家八十戸餘と見ゆ兵站部は其驛衙に設けたり然るに兵站部門前に積累ねたる物品は山の如く是迄の兵站部に見さる所なり左の方は前送物(米穀肉入鑵詰或は被服等)右

の方は後送物(日本送り)大砲、小銃、是に屬する彈藥大箱、小箱、幾百個鐵條の太綱細綱其他總て軍需品おしして悉皆清兵の遺棄物なり我曾て自國にありて諸新聞を讀み分捕品山の如しとあるを幾分か形容なりとれもひしに今日現品を見て驚入たり十二月中廣島にても亦平壤にても見たれとも此地の如き多數はなかりき多分金陵器機局天津器機局光緒十四年十六年なと鑄附たりぬ如何に弱兵なればとて餘りと云へは情なき仕方かなと歎息せるもれかし

軒端よりなほうつたかく敵人の打捨去りしいくさ物の具

三日午前七時半出發す山坂いくつとなく越て午後一時漸く義州に着す里程三里三十三丁此地は鴨綠江に沿へたる一大都府にして人家二千二百戸餘府城は石造にして不等邊多く角形をなし周圍約する四十米突普通の築造なり五門を設く城外の地形は西北二面は鴨綠江(壁を

距る五十乃至八百米突)を遶らし清國九連城に對す東は丘陵相連なり南は千乃至貳千米突の田圃を隔て南山峴の支脉を控へたと府廳は城內の北部ゑ位す諸官衙其附近に散布す即ち義州兵站司令部其他北部兵站監兵站病院衛生豫備廠等の宿舍となる我後備步兵第三聯隊本部も亦城內に設置す午後四時本部に出て公事を承知す余は第一大隊第四中隊に屬し清國盛京省大東溝守備隊勤務命せらる其よりして病院に至り前日送院の患者景況雪吹二等軍醫正(常之)に問合更に兵站軍醫部長小池一等軍醫正(正直)に公用を承知し宿舍に歸る

四日晴午前六時寒暖計華氏七度を示す午前八時義州を出發す回顧すれば去冬十二月九日廣島に於て聯隊旗を賜はりて、より昨日まて數日間拜しぬるを今日別るゝとれもへはそゝろゑ名ごり惜しき事と感しぬ

鴨の浦御旗にわかれ出るとも

ふたゝびあふく春を契らん

鴨綠江は義州城西なり故に西門に灣洲と云ふ大額を掲くゝれは江の海に入る所にて灣に見たるならん余騎馬にて江に臨む氷結鏡のことし除々蹄歩を進めて岸頭に達するに其流れ五六百米突はかりと見ゆ有名なる大川なるもさまてなしと心中怪しみぬ行く事三百歩はかりにして又々まへに增したる大川あり是は如何と土人に問ふに同しく鴨綠江にしていまのは中洲なりと云ふ大約一千米突もあらんか又沙漠の樣なる所にいたる更に最初と同しき程の大川を見る渡り過きて數百歩の後既に清國九連城を前岸に見る所猶一流あり瑷河と云ふ悉皆鴨綠江に屬す岸上に登り義州を望むに雲霧溟濛殆と一里ならん爰に於て初めて大川なる事を知れり今日悉皆氷結して鏡の如きも夏季霖雨の候一面の大川となると云ふ

馬に水かふべきすべもなかりけり

氷の海と見ゆる川つら

聞說鴨綠江(一名ありなれかは)は水源を白頭山に發し西南に流て清韓の國境を劃す江口は義州を距る大約十三里江口より上流三四十里間舟揖を通す府前の幅大約四千米突にして甚た急ならす江口數多の沙洲あり府城より九連城に至る三水を越ゆ府前を鴨綠江とし次を中江(國境)とし終を三江又瑷河と云ふ共に鴨綠江の一流なれとも中間二洲あるを以て名稱す江水通常十一月中旬氷結し翌年三月中旬若くは下旬融解し氷結後十日を經れは人馬往來すといふ

江の西岸即是清國盛京省九連城なり岸頭砲壘を築ける事大約十丁餘高さ一丈凸西方高岡には二十ヶ所餘大小砲壘を築けり此外城壁等更になし天然の山を以て守備となせることとし老龍頭山虎兒山左右に聳立す滿州東方第一線を成形す位置甚た險要なり人家大約三四十戸も

あらん皆商人體なり目下第五師團本部及兵舍等に充てられたり此江山砲壘あるも支ゆる氣力なく置去り退却せり行く西山に沿ひて南向する略平坦なり土人往來織るかゝとし朝鮮人とかはり頭部は四邊を剃り中央に毛髪を殘し其毛を組みて後に垂る曾て長崎其他開港場にて間々見たるも今日は其國に就て見れば貴賤老少一樣なり國の定制とは云ひながらいと見にくき事になん

そのかみのの定めゝ頭部を
いのゝの尾毛ゝ造る國たみ

猶西山に沿ひて黍圃を左右に迂回して午後三時安東縣に至る義州より三里半安東縣(一名沙河子)西端沙河あるを以てならん西北元寶山山脉聳來る四外卑低此地清曆光緒二年(我明治九年)新開地なりとゝ人家大約千戸家屋構造石室或練瓦造等外郭頗宏壯美麗なるも內部は麁末なり市街縱橫に區畫す清兵退却の際放火して大半燒失せり民政廳は

西方の商家ゝ設置す大日本第一軍民政廳の大牌を表門に掲けたり戰地定立病院を東南市街の人家五六戸合併して設置す有馬二等軍醫正(太郎)院長たり目下患者九百名餘日々增減ありと余第四中隊と共ゝ宿舍に就き其後市街に買物に出けるに陸軍諸官の舊同僚に出會す何となく日本に來る心地せり去冬廣島にて石黑先生我に示されたる歌に「新日本惠の露にうるほひていろ香さし添ふ野邊の秋草」をれもへ出されたり

新日本(にひやまと)けふ踏みさむる嬉しさよ
數多相見る故き友とち

第四章

五日晴午前八時出發す西の山に添ひて行事半里餘漸々地勢平遠田圃の間に民家散在せり道路平坦にして幅も廣し車馬通行自由なり朝鮮

國と違て人民は競ふて荷物運搬の業に就く尤慶事の閑なると利に鋭意なる清人なれはなり寒國と云ひ酷寒の候なれは人民防寒法中々に注意周密なり第一老少男女共に耳袋を掛けて凍傷を豫防し男は頭巾を種々の毛皮或は綿入布の深緑形にして冠るなり我北國の雪帽子に似たり衣服は厚綿入稍々我國に似たるも襟は喉頭まて透間なく合せたり下袴は股引の様にて尤太き綿入立付を穿ち靴は獸皮にて中に毛羽或は乾草の柔なるを足の上下に巻包む又一般に烟草を好む故に烟管の長さ二尺五六寸なるを必ず携ふ此地方は白衣の朝鮮人も數多往來して雜沓す殊に此度の戰爭にて出稼人あり加之我國の軍夫襲に野戰隊に就きて戰地に從軍せしも凍傷其他の病患に罹り解雇の者陸續歸來す其有様面部は煤にまみれ手足を凍傷に惱みて歩行蹣跚破れ毛布にまつはり頭巾は清人を眞似ねて種々の毛皮を冠ふり胸のあたりお鉦の様なる物を提けたり是は清人の飯入とも云ひ又頭あらひ盆とも云ふ軍夫とも往々携ふ分捕品なりとそ之れに反して新募の前進軍夫は意氣揚々大刀の地を引く程なるを幣び或は仕込杖を突もあり眼には雪除け青眼鏡鼻頭には「レスフラト」を掛け頭巾も亦毛皮或は羅紗綿入等なり更に我軍隊は軍衣の上に防寒川鼠毛布大幅外套を着せり此諸種の人々混合往來する百人百色の奇觀なる言葉に尽しかたし古昔名書師の意匠に見ゆる百鬼夜行も斯くやあらんとれもはれたり

物の怪の夜の往來もかくあらん
寒さをふせぐ人のよろほひ

此地方及ひ朝鮮共に鳥あり俚俗喜鵲と呼ふ我國の鳥と大略同しきも形小さし且多からす此外に老鴉と呼ふ鳥數多あり其形鴉に似て小形に體太とり脊骨部白く両羽の根青緑色少しく光澤あり腹白し其聲チヤツミミと聞ゆかけすに似たり其動作に於ける鴉と同様なるも温柔にして狡猾ならす人ゐ馴るゝ事妙なり路傍の行樹殊に柳枝に憩ふを

好む喜鵲と共に飛遊す回想すれは去年十二月四日仙臺を發し廣島宇品を經て海を航し朝鮮國より清國に來り既に三十日餘幾百里を經過せり此異鳥を見る唐詩に「西向輪臺萬里餘。又知鄉信日應疎。空山鵲鵲能言語。爲報家人屢寄書」と云ひし事共感しられたり軍に從ふ身なれは家鄉の便なと聞くへしとはれもはされども亦自然の情思如何ともする能はす

言つてをうむによせしから人を
れもひやらるゝ今日のなか旅

幾多の田畦塘澤をたとりゝて午後五時大影壁山鎮と云ふ部落に着けり

六日晴午前八時出發す昨日と同しく平遠の田圃を過きけるに漸々砂土となりぬ馬上はるかに望めは西の方は海なり果せるかな午後二時大東溝に着きぬ此地は今より冊年前海岸より大溝を堀りて港を造りしとそ此地に入らんとする野外に小さき舟の形狀なる厚板の箱此處彼處に置けるあり是を土人に尋ね問けれは死人の柩なりと偶蓋板のゆるみたるあり取り見るに女の死体にて衣服を纏ひ長々と臥したり舟形の尖の方を頭となしかならす北に向けぬ何故に斯くするそと問けれは遠方の人にて其主人のわからぬを斯くすると然して何日程置くやと問返しぬるに言語通せす筆談も不充分にてくはしくは得聞さりき

はがなしや主人しられぬなきからの
柩(ひつぎ)のまゝを野邊にれくとは

此地は我輩の守備地なれはまつゝ舍營に入りて旅裝を解きけり井上大隊長其他の人々は滯在せられけれは相逢ふて物語り打解け酒酌かはしぬ

七日晴此日大隊長其他午前七時岫巖地方に向て發す我は藤井中隊長

とともに前守備隊第三師團歩兵第十八聯隊の一部分と相代り守備の役に就きぬ海山かけて數日の行軍種々の事見聞せりまた此後の事ともを書記して友人にしらせんとつたなき筆を起しぬ

外國の海の面や山の邊を
ふるさと人につけしらさなん

八日晴午前八時隊兵診斷も濟て其より市街を巡回せり人家大約四五百もあらん東は大溝にて西南北とも田圃を以て遶らし其中に市街を區畫す中央に兵營ありて大約百五十米突東に門を開き西南北は悉皆砲壘高く三四米突に築けり其東北の大商家に兵站部を設く林憲兵少佐(忠夫)及屬官事務を整理す而會して土地景況其他聞合せたり同氏は去明治廿七年十月三十日此地に上陸せりと其節は日本軍の占領なりや清兵の屯在なりや判然せさりし故暗夜に小舟にて大東溝を遡り密に上陸せしにれもはすも誰何され始めて日本軍の占領なるをしれり

其次第を聞くに三日前に清兵を追擊して今日に至りしと然るに東北の商家突然火を發す餘々燃上りし故同氏の一行其他土人を指揮して消防に尽力せり此地は用水に乏しく消防意の如くならす看る〳〵數十戸灰燼となり後に取調ふれは草賊とも清兵に假裝して放火し其の虛に乘し窃盗せしなり土人は日本軍の簇々上陸せしにより周章狼狽其身の措き所をしらす四方に逃亡し悉皆空家となりたり今日に至り半は歸宅し且又日本軍の嚴整なるに歸服して兵站部運搬用を勤め大に便利なり其後草賊を探偵し巨魁に等しき者四人斬首せりとそ打越憲兵曹長の手帖に據りて調ふれは清兵追擊は大迫少將の隊にて攻擊せられ彼等遁走の際自から兵營に放火したり兵數五百名餘なり但し平時も貳百名は屯在すと遺棄物品は白米大豆小豆鹽麻數多なりと云ふ

九日晴午前九時頃溝内に至り見るに其廣さ我東京深川の木場に十倍

はかりと見ゆ東西幅七八百米突南は田圃に行留りとなり北は海に入り大約一里よして溝口なり鴨綠江口と相對す悉皆氷結し數多の木材大小船鎖されたり其内尤困却なるは小蒸氣船漢陽(カンヨウ)號なり此船元來朝鮮國の所有なりーも去年八月中仁川港ゐ乘捨ありしを日本軍占領ー て用船に充られ爾來兵站部の附屬となり昨年十二月十日此地に來り旬日間は無事ならんとれもひしに十三日夜突然寒氣を催し氷結せられ今日ゐ至ると船長に何日頃迄碇留する意なると問へは春分後を待つより外なしと其他日本商人の手船三艘清人の小船十艘餘悉皆氷に鎖されたり

ふないかたわつき氷にとさされて

名のみはかりと見ゆる大溝

溝中に氷結されたる巨多の木材は實に莫大なる事にて大約壹尺角壹尺五寸角長さ三間許筏に組み或は敷ならへたり船長に其産地を問ひ

は是は朝鮮國咸鏡道の深山より伐取り鴨綠江を川下けして此地に集積す時機により天津北京に輸出す此地の商人及天津出店商人等の所有に係る其商人兵乱にて遁走し恰も遺棄物に似たり頃日二三人我兵站部に木材取調たき事とも願出たりと聞く憐むへし數百千の木材賣買は勿論自已の所有も紛乱して判然せす多少窃盗せられしもあるへし

くれまさ木百千萬の賣買の

往來もたゆるわつ氷かな

十一日當隊兵卒高橋勇治郎病氣よろしからす實は昨年十二月下旬朝鮮國宣川にて感冒ー發汗劑を服させ一時輕快せるに又々氣管支炎となり両三日來苦悶し病勢容易ならす因て明日は義州或て大孤山病院に送るへくやと思ひ取敢す兵舍内に安臥させぬ此夜十一時頃痰喘塞盛呼吸息迫すとの報あり直に往て見るよ既に危篤に陥りたり種々手

當せしも遂に蘇生せさりー此人越後國湯原郡新發田より半里はかりなる中田村の產なり定めて宿元には親兄弟もありぬべく訃音を聞きては愁傷するならん又我醫治の拙なき事とも恨むへし去りなから御國の爲めに遠征せし身なれは死して名譽となる事をあきらめられよなきからは火葬して仙臺第二師團に送りぬ

もゝちさを誘なへきつるつわものを
浦の笘屋の露ときへぬる

當地前守備隊第三師團第十八聯隊附醫官は土人の病氣を施療されしに其の例により我輩到着後逐々病者治療を乞はれたり兵站部よりも依頼ありて通行軍人軍夫を診察す毎日二三十名に及ふ其内重病或は歩行困難の者もあり隊務に差支なき限り近邊ゐは往診もしたり元來軍隊の勤のみとれもひしにはからさる事にそある

年老てつたなき業を外國の

病者紹介として兵站部用辨人鞠子明と云ふ者來れり山東省產の一書生にて文字ありて筆談の勞をとれり又宗江と云ふ者大東溝にて賣藥營業をなしぬ其父曾て天津に至り藥舖の手代を長く勤めぬるとて漢藥及醫治ゐ關する事聞覺えたり毎日來りて病者紹介をなす一日閑あり其者の招きゐより宿所ゐ至る賣藥數品畢頭にならへ置き床頭には神農氏の像を掛けたり兼て我西洋醫學の解剖生理の談話及圖解なと聞せつるを感し彼是比較的の論說に服ー懇に聽取せり

なきからをときひらきするてたてもて
もゝくさねふる人につけなん

十四日の夕暮より雪降り出し十五日も引續き降り積みぬ此地は都て平坦にて溝面も同樣氷結しけれは地上のことく一面銀世界となり時に兵站部書記柿川重治郎(岩手縣人)來り雪見の戲言なとして笑ひけり

然るに同氏の談に去年上陸以來人民頗る我軍に歸服し毎日牛馬車運搬の事を勉勵するにより數百の日本銀貨を領收し欣喜に堪へす清兵の暴に劫奪暴行放火等を恨みけり今日の雪景は人民一般白銀を得たるを表したりとも云ふへしとそ

海山のわけへたてなきしろたへの
雪をいたゝく村人の家

清國は牛馬を以て農業及運搬に充て其傍鷄豚を養ひて食料ふ備ふるなと自然に牧畜業となれり此夕牛馬鷄豚なと數多群り出て田圃をあさりぬ

うゝうまやいのゐ鷄むつみ合ひて
田の面にあさる雪の夕暮

我守備隊も既に一旬日餘を經過せり然るに各地兵站部位置の都合にや又は前方に在る野戰隊の戰況によるにや更に土城子に前進移轉すへき内命あり尋て兵站部は大連灣に進まんとす人民此事を聞き大に失望し若しも守備隊兵站部引拂となる時は又々清兵の殘徒暴行或は土賊の襲來等尤恐るへしと云ふ我皇威の嚴にして仁慈なる人民歸服の狀況以て知るへし此に於て藤井守備隊長及林兵站司令官とも協議して義州兵站官に具狀せしかは若干兵を殘し置く事となりぬ人民の喜悅一方ならす因て當地人民重立たる者送別報謝の意を表し公議所にて酒肴を呈したき旨申越したり堅く辭したるも中々止みかたく數回願出けれと承諾せり二十日午後二時守備隊兵站部諸員公議所に至る酒肴を出し主客獻酬數回の後人民歌ひつ舞ひつ歡喜せり我れもへらく古聖人の所謂仁義の政あり忠信の交りあれは四海皆兄弟なりと既に今日人民の歸仰する全く内地人と同し景況なるを諸君と共に談話せり

四方の海みなはらからと云ひつとふ

ひとりのれしへ今日そしらるゝ

酒宴を終り一同公議所員の厚意を謝して立出ぬ庭前を過ぎけるに氷塊の壹尺方或は貳尺長方形の木材片のごとき山と積み重ねたり是は何故なりやと尋ねれは此地海邊にて飲用水に乏しく殊に清水を得る甚た難し故に遠方の河流の堅水を伐り取り來たり飲食物をつくるに臨そみ融解するなり過刻貴客に侑むる肉の羹は皆此氷塊もてせりと如何に寒國なればとて水を材木片樣として儲蓄するとは歸朝の日內國人に告けても眞實とれもはさらん

伐り氷庭の面に積み置きて
あつものつくる儲けにそする

第五章

二十二日夜移轉前進の電報あり翌二十三日午前九時大東溝出發す兵站部林少佐同道前後提携して北に向て原野の間を過行ぬ午後三時北井子ゐ着す行程七里

二十四日晴午前七時出發す前日同樣林少佐同道せり午後三時龍王廟に着す行程六里半此地龍王廟と唱ふは其廟われはなり休憩の後至り見るに驛の西端なる洋河の岸にあり周圍百米突餘皆石塀なり前殿は幅五六間奥行二三間許「海不揚波」大額を掲く其他少額數枚あり殿中に土偶人十二三個起坐両体相交ゆ本殿は幅十間許奥行四五間殿中央に龍王衣冠整肅起立す左右侍從と覺しき偶像亦肅然たり其內女体三四個其他魚族の頭を摸造せしあり蛸ならん總計四十餘就れも最初は金銀箔及諸彩色美麗ならんに今は大半剝落し見るもあはれに破壞せり廟の大扁額「德屆江天外。慈通澤國中」其他柱共に聯語を記する數多あり見終りて前門傍の小家に至り留守の老父に筆談にて問けるにうとま

しや無筆文盲其上八十歳餘と見えて耳まて遠く何事も得聞く事なり難し唯一見の想像のみゐて過きぬ

たつのきみ宮居はいたくすさみけり
まもる翁もありやなしやと

二十五日晴聯隊長友田歩兵大佐守備地巡回として昨日此地ゐ宿泊せらる今日は我々と同道土城子ゐ向はれける林少佐は大孤山に向つて出發す我朝來患者數名ありて此處彼所の宿舍に往診す此日清暦十二月三十日に當り市街中々賑はひて歳の物色々賣出しぬ宿舍の主人は早くも新春のよろほひかさりなと營み床前ゑ歳神の書幅をかけ略暦を貼し香を焚き門戸には紅箋に聯語の祝字「聿脩厥德永發其祥」「文官提筆平天下」「武將舉刀安國家」なと丶記して貼せり此有樣を餘所なから暫見して又もや年迎するかとそ丶ろにれもはえぬ

初春のかさりよそほひ垣間見て

またも齡を重ぬとそれもふ

彼是とれもはす隙いりて午前十時頃出發せり沿道の村家も皆々初春の設けにいろかはしく見えけり又或所に庵室の如き小さなる石造の堂ゐり石門に貼せし紅箋聯語「廟內無僧風掃地・神前缺燭月當燈」を記す都て祝字聯語は人家は勿論神社佛閣一樣にする此國のならはしならん

門毎にくれなゐ紙ゑ書き記す
文字のかす〳〵祝ふはつ春

午後三時大洋河を右ゑわたり左に過きり四時半土城子に着す

廿六日曇り此地は山間の小村にして人家十七八戸もあらんいつれも草茅矮屋去冬來兵乱にて遁走せしもの半を過き壁落ち屋根漏り人の住むへきとも思はれず我か一行も是には歎息せり殊ゐ山丘は裸山にて樹木も少なく從ひて薪炭も乏しく防寒及炊事用には泥炭を焚く未

り此泥炭と云ふ物は或人の北支那漫遊記に見えたりしか蘆芥に泥土を混交し煉りかためたる四五寸長方形の土板なり日本の煉瓦石に似たり兵站部より渡されたれは取敢す焚きけるに其煙ふる事たとふべきものなし滿室暗夜の如し煙ふり過くれは灰となり温暖減少し土人の語に煙ふる内のたのしみなりと眼病や呼吸器病人なとには迚ても堪ゆべきにあらす然るに我宿泊せし家の老人は八十餘齡と見えける に泥炭を焚き悠々然として居れり煙烟如何を問けれは敢て管せすと そ習慣とは云ひなから驚き入たり

童子よりならはしなれや泥炭に
寒さをしのく八十の老人

斯く何事も不自由なる小村なれとも山里のたふときは井泉の清らかに又河流も澄わたりて昨日の大東溝にれける海塩混水や白粘土水のことさにあらす是をは人々喜ひけり

山里はとはーき事の多けれと
清き泉を汲むそ嬉しき

去りなから毎日曇りて雪空なり兎角太陽を見るゑと少なかりき廿九日夕暮より三十日三十一日と引續き降りしきり其上に風まて吹き荒み道行人や牛馬車なともいつしかすくなくして唯に山澤の白妙のみそ見にける

降り埋む深雪の山の驛路は
鈴の音さへかすかなりけり

二月一日雪少歇大風寒暖計華氏零點下三度攝氏零點下二十度朝來雪は少しく歇たれとも三日以來の大雪に又も大風吹きかわりたれは寒氣も一層酷烈にて道の隈にはふきよせの雪五尺或は七尺に堆たかく又平地は土と雪片を捲立る有樣恐ろしなんど云ふはかりなし然しなから戰地の事なれは公用もしけく平日のゑとく人々往來せり我隊の

兵卒及人夫等四十名餘凍傷にかゝり耳や手足を腫脹し惱みけり其内船山留松と云ふ者陰莖を凍傷せしめ小兒の拳よりも大きくなりぬ何故に被服の中に包み置きたるものを斯くせしと問けるに小便せし際手指の凍りたれはぱたんをかけたるも不充分と見えいつしかはつれてありしより雪の吹き入りたりと此者元來越後北蒲原郡新發田近郷の生にて兼て風雪なとは意とせさるより此患おかゝれり

此夕聞説豫備砲廠將校下士卒六百餘名小黑山及ひ小窩子より龍王廟に向て前進の途上風雪に逢ひて即死三名凍傷患者二百五十名餘一時に發生し大困難なりしとそ此小窩子より龍王廟の間は三里はかり漠々たる原野にて如何ゐも風雪の猛烈なるもひやられたり昨今敵兵諸所の城砦を捨て遼陽或は奉天府に遁籠れり如何せん酷寒風雪の候なれは我軍の攻擊もしはしためらへ又前進軍もれのつから遲滯となりぬ唐詩に「月黑鴈飛高。單于遠遁逃。欲將輕騎逐。大雪滿弓刀。」と云へり鴈

來の時季すら大雪とありまして寒中の事なれは驍將猛卒なりとて堪ゆへくもわらす或人の談話に清兵敢て恐るゝに足らす恐るへきは酷寒風雪の强敵なりと信なるかな

城をぬきとりてをくたくますら男も
吹雪ののべにたちなやみけり

當隊去年十二月廣島に着せし時は第二師團仙臺兵滯留してありけり野戰隊の事なれは進路の景況およるならん我一行は是に先達て宇品港より上船朝鮮清國と行軍し此地に守備せるも早既に三ヶ月經過せり近頃聞く仙臺兵も亦山東省榮州に上陸進向の途に就きたりと當初をれもひは仙臺にありて征清軍の如何に艱難辛苦せらるゝやと案し煩らひしに今日は其身其位置となり更に各地の野戰隊を案し煩らふ事とそ俗語にあすか川の流れきのふの淵も今日は瀬とかはると言ふあなかち空言にあらさるなり然るに此の六日の夜第二軍の電報にて

仙臺第二師團と熊本第六師團兵の一部分と共に威海衛を攻撃占領せりとこれを聞く嬉しさ限りなし彼の名取郡長町にて第二師團の首途を見送り佐久間師團長石坂軍醫長によみて贈りしちかへの歌も今あそのしるしとしられけれ

あそのあき名とりの里ゐちかへてし
きみかはまれをこよひあそきけ

第六章

二月十日土城子驛に患者輸送部を設置すとの事大孤山戰地定立病院より通知ありて同院傭醫澤田惣太郎看病人二名及ひ人夫若干派出せしか是は岫巖或は海城おゐる野戰負傷患者を大孤山病院に轉送する沿道兵站部宿泊の設なり頃日守備隊長も兵站司令官兼務となりければ其患者の送迎宿泊所の設置糧食の配付等平常通行人と違ひて心を

用ひてとりあつかはれぬ五百名を十日間に轉送する豫定なりとう過る一月中旬前兵站司令官中島騎兵大尉(良寛)勤務の時も二百五十名を十日間に轉送せらる此度は多數なれとも相かはらす丁寧にして大孤山に送りぬ毎度宿泊所に就きて診察す銃創患者は十分の二にもあたらすして多分凍傷或は雜病なり都て前病院にて治療を加へたる後なれば稍輕快に趣きたり

つはものゝ痛手にかゝる人皆を
むかへて送るむまや路のをさ

二月十四日夕つかたより少しく感冒の心地にて早く寐たり兩三日は食物の味もかはりぬれは喰やらす衾かつきて打臥しぬ時に兵站部より內地有志者の寄贈物なりとて烟草其外四五品頒布せらる其中に手拭の摸樣に百戰百勝宮城縣職員一同と染出せしあり臥床ながら取上け頭の汗なと拭ひたり兼好がつれゝ草に病ふ臥しては漢の食をね

かひふるさとの扇を見て涙をなかせしと記されしもれもひ出せり是に付て一の談話あり十日程前の事なりしが兵卒の病にかゝりしわり我に告て言ふ我病實に輕からす過る頃死去せし高橋勇治郎の後を追ふならんあはれ良き藥たまはりて救はれよ宿元には老父母及妻子あり願はくは生きて歸朝したしとてさめ〳〵泣きけり必らず心を傷むるなかれ其内にはれふたるへしといとねんころになくさめける實に千萬里他國にありての身なれば中々餘所にはれもはれす人の心はいにしへも今も同し事なりと彼是相あわせて感しぬ

國にむくふいくさの群に入る人も
病みては家をたもふなるらん

十七日朝またきより雪ふりて寒さも強かりし十八日夕暮晴たりしかるに又々風吹き出し裏山越しに襲へ來る其音は鳴神のふとく響きわたり枯木の枝なと打折りてものすさましく十九日の夜に至りますま

すはけしくなりひめもすよもすがら臥ぬる身にはつちさくるしさかきりなしあな無情の風やと獨りごちぬ

草の宿いふせき夜半を忍ふ身に
猶うらめしき山れろしかな

斯くさわかしき中にも村人は兵站部の荷物を運搬し賃銀を得んと相爭ひて四五頭の牛馬を一つ車に繋へ眞夜中より東雲かけて鞭うつ音の絶へさりき

山れろしとけしき里の曉に

去年來朝鮮清國に宿泊或は寓居せり然して民家の構造中賞すべきは暖爐の方法なり清人坑上(カンチヤン)と稱し朝鮮人は温突と稱す通常住居起居の間床下に炊場の火氣を導ひくなり炊所は多分壁外の土間なれは煙烟等居室に入らすして暖氣のみ床下に至る床は都て厚游石板にて縱横

に疊積し粘土の煉りたるもて空隙及上面を塡充す溝或は管の如くに造り餘烟は屋外に石管或は煉瓦管にて排出し又上等の室は炊場おかゝわらず單に坑上を設け室内の隅や屋外に火口をつくり火を焚き暖氣を室内に送るなり故お我國のゐどく室内火鉢を要する事なし西洋の「クワヘル」に効力れとらず但ー床の搆造中石板及粘土の裝置麁惡或は破損を生する時は煤烟室内お漏るゝ事あり此頃五六日平臥してゝろよきを覺ゆ

ものかゝく竈の奥を臥床のもとにみちひぐなくみかしこき

此に反していみきらふべきは便所なり貴賤貧富に論なく家屋のうしろ或はかたはらに石の箱に似たるもの三尺に西五尺程の場所を設け其四方に屈みて便す雨覆は大方なしまたあるもあり尿は戸外適宜に放瀉す大雨雪或は寒夜などには室内にて便し翌朝取除けるなり一日

土人の家ょ病者あり往て診ず傍に遊び居し小兒大便せり其母直に犬を呼び食ーめて後をも拭はず又一人の孩子小便せり敢てかまはす其内床下の火氣にて乾燥す此狀況言語同斷にして記するに堪へず

土城子は前ふも記する小村にして兵站部を設置する家屋至て狹隘なり然して前送後送の諸物品及兵器彈藥を藏むる倉庫とする所なく止を得ず近傍の空家をつくろひて用ひたり門戸も不充分なれば夜陰は守備哨兵の注意困難なり既に本月上旬村人四五人共謀し軍糧米を窃取せんとて忍入り先つ車は五六丁の後に指置きたり然して糧米を擔き出さんとせしを哨兵の認むる所となり二人を取押へ憲兵に引渡し糺問すれは貧困にて旦夕飢餓に迫り自然如此と本人及村長の歎願お て後來をいましめ又村民一般懲戒として三日間兵站部の前お捕縛し置き衆庶に一覽せしめて後解放せり然るに十日程過て又々白昼哨兵等の隙を窺ひ一人倉庫ょ忍ひ入り軍糧米を窃取し自己の股引や懐中

に詰込み潜み出たり其歩行何となく常に異なるより人の見認むる所となり取押ゆるに果たして窃盗者なり憲兵に引渡し糺問せしに遂に白狀し前度の懲戒を輕侮し貴重なる軍糧を窃取したるは其物の多少を論せず死罪に行ふ事となす二月二十四日午後三時兵站部前田圃の傍に刑場を設け兵站司令官藤井陸軍歩兵大尉及軍醫憲兵屬官等列場す村長始め人民をして一見せしむ宮崎憲兵軍曹をして刀を執らしむ犯罪人は清國盛京省西周家屯孫有升二十年なり斬首の後親族の願ゐより死體を引渡せり

敬なきれろかの民は天照らす
法のあみをばしらぬなるらん

當地守備の勤務も彼是する内三月上旬となりぬ前に記したることく清兵敗走の際强奪或は放火せられたる人民多分山間に逃け走り空屋のみ多かりしも近頃我軍の整肅寛仁なるを知り漸々歸村ー兵站部使

役をつとめ賃銀を受け生計の幾分を補なひて老人や小兒なと飢寒を免かれ我　皇威の尊とさを感し歸仰せり孟子曰。黎民不飢不寒。然而不王者。未有之也。を目下に見たり殊に温暖の氣候に趣むきたれは恰も枯木の春に逢ぬる心地せりとよろこひあひぬ是を聞く我々もまた心よき事にこそ

老も兒も飢す凍えす大君の
ひろき惠みの春に逢ぬる

近日前進の兵員多數に至り毎日百名前後に登り又海城及岫巖より後送の患者も五十名より少なからす當地人家少數にて如何ともすへきようなく東土城子に分派宿泊せしむ其民家も亦麁惡にて宿泊人困難の事に聞きぬれば一見せばやと宿を立出たり恰もよし打越憲兵曹長宮崎軍曹巡回に遭遇せり此日は三月六日の事なれは天氣うらゝかに轡をつらねて山の南や水の東なと踏行ぬ深雪厚氷少ーくゆるやかに

なり岸の柳は芽を出すかと見ゆ春風そよ〳〵吹送れり唐詩ホ「五原春色舊來遲。二月垂楊未掛絲。即今河畔氷開日。正是長安花落時。」なと吟し合たり聞說前軍は既お牛莊を攻擊占領し更に山海關に進向せんとす我昔日の少壯なりせば野戰隊に編伍を請ひ北京長安の柳や花を折るべきものを

野邊の雪河邊の氷とけ初めて
れもてにふるゝ青柳の風

民家に至り見るに茅屋なれとも聞きし程にもあらす故に可成丈修理を加へ宿泊人に便利をあたふへく說き示し歸りぬ

延喜年間菅原道眞公筑紫に左遷せらる昨日まて三公九卿の御身今日は賤かふせ家に住せらる頃し春の半になりぬれば都の事共れはしく出され「東風吹かはにほひたこせよ梅の花主人なしとて春なわすれそ」と詠じ給ふ如何にも罪人の事なれば御館も自然風雨に委するあとくならん然るに植物も感しけん一夜の中に筑紫の御住居に現出せしとそ「千里飛梅一夜花」と言ふ詩句もありぬ其はむかしの事今日は　明天子上にあり良弼下にあり外國遠征數萬軍の艱苦をしろしめされ優渥なる恩惠を賜はれり猶又其内にある者まて厚く愛撫せらるれもへは我宿の門の柳は朝な夕な定めて春風に吹かれ居るならん

いたつらに門の柳もものとかなる
春の日影にいとをかくらん

夜來雨降り翌七日に至り歇されば外出もせす閉ゐもりぬ時に一軍人訪來れり我記事とも取出し見せけるに閲覽後告けて云ふ老翁頗りに文字を弄するか今日軍事多端の際文弱に流るゝ弊あり請看清國斯の如く敗衂する皆是文弱による斷然歇むべしと我答て言ふ清國今日の文拙なくして古昔の比にあらす武も亦近年洋式を學ふ如きも猶幼稚なり先つ第一に政体齊からす人心和せす是ぞ大敗を取る原因なり彼

朝鮮國平壤城を見よ東に大同江の水を擁し北に牡丹臺兎山を扼し西に丘陵を控し之に加ふるに數萬の兵卒數百の兵器を備へ時季は中秋殘暑もうすく所謂天の時地の利を得て唯一個の人和を失なひたれとゐろ敗衂せめ文弱の故にわらす君は一を知り二を知らさるなり文武は車の両輪のゐとし文ありてこそ武も用ふべけれ大凡上天子の勅詔より告示訓令公私通信皆是れ文にして詩歌のことは其餘情なり知るやなきや我國前九年後三年奥州征伐の時八幡公勿來の關を過きけり櫻花爛熳風に飄かへるを見て「吹風を勿來の關とれもへとも道もせに散る山櫻花」と詠せらる賊徒平定の後安倍宗任を生擒して京都に引けり公卿方是を見て東夷野人と侮とり梅花を取りて何そと問へは「我國の梅の花とは見ゆれとも大宮人は何と云ふらん」翌日の命脉はかり難き身なからも精神確乎綽々餘裕あり八幡公の前に大敵を置きなから花ゐ心を慰めらるゝも亦同し宜なるかな此の俘虜を免して奴僕となし深夜の微行にも召連られしとそ是ゐそ文武兼備の人と云ふへけれ此記事從來醫務に關する公書文の餘暇に成る敢て文字を弄するにあらず何そ君の勸告を待べきやと軍人云ふ嗚呼眞に饒舌なる老父かなとて笑ひ去りぬ

文の道弓矢の業を兼てゐろ

六つのいくさのつかさなるらめ

午後に至り雨も歇みたと屋外高聲に我を呼ふ人あり戸を開けば桑原二等軍醫(東岸)なり氏は熊本產にして曾て仙臺に赴任し幾はくもなく後備となり我宿の近所に住居せられ朝夕睦み合へり去年七月第六師團の召集に應し渡韓せしと聞けるかはからすも訪問せられ互に無事を祝し朝鮮清國の戰況や又は仙臺の事なと相交へて物語りぬ軍隊に促されて別れんとすあまりに名殘り惜しきなり今日は月こそ三月なれ七日にして一と年隔たてゝ逢ぬる人のしはしの間に別るゝは牽牛

織女に似たりとて笑ひけり同氏は馬に跨り我は茅屋を出て見送りま
たの逢ふ瀬を契りけり

織姫のたくひならねと一とせを
隔たてゝ逢ひてまたわかれつゝ

相逢ふてかたらふ隙も馬の上
草のいほりに殘るしら露

八日朝鈴木憲兵軍曹廣島に歸りぬれは何か便りにてもありやと尋ね
らるれもへは去年十二月廣島出發の際石黒長官閣下に別れを告け互
に酬和の歌よみかはしけるに其後音信もなくゆかしけれは玉章つく
りて托しぬ其文のはしに二首の歌よみてたてまつるなと記せり

こまの海もろふしの山遠ければ
東風の吹寄せ一と葉だになし

春もやゝたぼろ月夜となりつれと
雲井のかりはかけもうつさす

第七章

十日朝大孤山戰地定立病院に取合せの公用ありて到りぬ此間は四里半と云ふも近き樣にれもはれ十時頃着けり病院長雪吹軍醫正(常之)大井藥劑官(玄洞)等に面晤し夫々事終りて後市街を巡覽せり此地は所謂大孤山の名に負かず大なる岩山西北に聳え松柏諸樹繁茂せり市街其南にあり人家大凡四五千もあらん縱横數條に分ち山ふ添へたるは少しく高し大洋河帶のふとく市街の南を西に曲り流れて海に注けり港口は氷結して舟楫の往來絶ゆ小蒸溜船及小舟とも鎖ふれたり人家の重なる部分去年の兵乱にて半は兵燹に罹りぬ我軍占領後軍隊殊に近來北部兵站監を義州より移轉されけれは諸官衙相列なれり故に清國及日本商人相並ひて門戸を開き諸物品を販賣して稍繁盛の景況なり

大きなる一つの山とともなふれと

軒ばちまたにむるゝ市人

此國兼て文字國なれは商家は勿論民家とても門戸に初春の祝辞聯語を紅箋に記し掲出す過般大東溝龍王廟にても一見せしか爰は又一層盛りに掲載す先つ商家に就ては「開市大吉萬事享通」此語は一般に記し其他はたもひゝなり「交以道接以禮近者悅遠者來」「越國大夫曾貿易孔門子弟亦生涯」「何須南國問陶朱唯向東山學子貢」「貿易不欺三尺子公平以取四方財」「門迎春夏秋冬景戸納東西南北財」「德門富有三陽景財地春生萬斛金」又展額の大なる「物華天寶人傑地靈」「財常足矣利莫大焉」等なり或割烹店を見るに「美味可招雲外客清光能引洞中仙」此文字に因れは如何にも美酒佳肴及佳人もあらん老父等は別意なけれとも少年輩はいかゝとれもはれぬ各所散歩するに浴室と見えて人々手拭もて出入するあり展額に凝香亭と記せり一枝濃艶露凝香の意ならん門柱に「入塘淨却

精神爽出池洗去身上塵」又二枚の扇に「身有微恙休來洗醉客年高勿入池」浴室に至り見るに煉瓦にて積立て其縁は厚く浴客の腰を掛けて休むに便す横四五尺縦一丈許に造れり混雑言に堪へす入るにも懶うく立出ぬ其より東方の市街を歩行す藥店とれはしきあり展額の大なる「壽福雙至橘井杏林」金字夕日に輝けり此外到處掲出して其數幾許ともしれす尤可笑しきは至て賤しき矮屋の表に小標をかけたり重羅白面塞雪欺霜」何を賣るかとのそき見れは温麺粉店なり又直に食する樣にもして賣れり

市の門しるし文字の多けれは

讀むものうくれもひけるかな

其より港の方に至り見るに河幅六七百米突両岸高からす三ヶ所に板橋あり洲渚一面枯葦のみ船々を氷結し至て寂寥たり市人に聞けるに來月始になりなは定めて東南風吹き暖氣となり氷解して船の往來も

なるならん其時こそ商業も好都合となるらめと語りぬ

雪氷とさす港の市人は
東風のたよりを待わふるかな

市街の東南角河流に臨む高丘に古塔あり八面方形にて北を前とす魁星樓と記する扁額あり樓上下を合せて一丈七八尺其外蓋上中央の尖鍼四五尺もあるならん山本憲兵大尉(政元)の筆記を見るに魁星爲神人也主文學事是以考取士子可點狀元乎云々遠望すれは恰も燈明臺のゝとし(魁星樓の事第十章に至りて再たひ説明す)道を轉して大孤山の麓なる天后宮ゝ至る宮は土俗に寺と稱す山の登り口ゝ南面して石壇高く築立て其上に造營す壇の左右は石柵にして中央正面に前門あり天后宮金字の額を掲く鐘鼓両樓高く前門の左右に聳ゆ正殿天后聖母を安置す金字扁額數枚光輝赫々たり「海天活佛光緒十年」「恩被黎元光緒七年」「德恩孔昭光緒十二年」其他左右壁上山水畫幅鮮明なり

天后聖母は正殿中央椅子に憑る頭に王冠(前後數條搖落垂る)を戴き袞龍の衣を着す首に紐の樣なる白布を纏ひ左右に垂れ両手を越て前の膝に至る身躰は尋常人より稍大形ゝして金色赫々たり左右に小畫大なる團扇のゝときを持て天后の頭上を掩ふ右傍少しく低き小壇上に侍臣四人起立の小像あり左傍に大船の模形を裝置す其前の左右側壁に侍婦二人宛起立す開説天后は南方福建の人林氏の處女十六歲にして神道を得たり白日天に昇る普濟群生と碧はれけるとそ東方少しく低き處に關帝廟あり前門扁額忠義神武黑板金字なり正殿額「萬古綱常」「允文允武」「亘古一人」「洪然正氣」「千秋忠義」等なり中央高楷に關帝正立し頭に王冠を戴き両手にて笏を持ちたり左方小壇上に周倉正立武裝を着け青龍刀を携さふ右方小壇上に關平(關羽長子)正立武裝にて短劍を携さふ三像共に五尺以上にして通常人と同一又少しく低く地藏廟あり(元昌宮と云ふ)前門扁額幽冥救主と記す四天王左右に立つ門を過きて

左右に堂あり十王十體を安置す牛頭馬頭の羅刹白衣を着たる幽靈を呵責する有樣慘狀見るに堪へす即ち地獄にして炮烙を抱かせ劒の山よ追登せ或は臼杵にて人體を搗碎くなと現然たり左堂「正直是與」右堂「影善懲惡」正殿「萬法皆空」等の展額あり中央に地藏菩薩正立す左右に羅漢八體つゝ分列せり此等の莊嚴は頗る美麗なり殿堂の周圍に古松數樹森々たり東西両房に老僧及宮守人両三名住みて佛教なと說きて人民に聽かすと云ふ死者あれは葬式に臨み讀經す此西方平地あは人民の墓地あり又天后宮のうしろ尤高き處に狐穴あり殷討王の妃姐已の妖狐となり來りて住し所と云ふ土人の附會說ならん

熟考するに支那國古來聖賢の敎によりて國を建つ佛法は夷狄の邪敎とし唐時には韓文公佛骨表を奉りて左遷せられたり然れとも中々盛なりしならん殊に滿州地方なとは淸朝以來の開地にて儒敎より佛敎を先にし人民を統御せしと見えたり兎角に言語異なり都て

筆談なれは詳悉する能はす古稱詩に「佛會人天稱八萬孔門子弟只三千。老僧獨坐藤蘿石。時看浮雲過眼前」と云ふ佛敎盛んにして聖堂何の處にあるやとれもはれぬ或は儒生のなきにしもあちさるべし如何となれは人家門扇の文字對句の面白く見るをれもへはなり

國民をさとす佛の家はあれと

ひとりの門やいつこなるらん

大孤山の西にも亦岩山あり少しく低けれと東西に長し石人山又小孤山とも云ふ山本憲兵大尉の談話に此の山見るへきものあり石人石門石獅石鳩等就も奇なりと言ふ翌十一日又々巡視し更に守備隊長井上中尉なと訪問せり彼是する內雪降り出けれは土城子さして歸りぬ十五日両三日前より雪降り續きて寒さも呀かへりければ薄暮酒なと酌みて早く臥したり夜半とれはしき頃はからす耳にふれたる聲あり能く聞ぬれば歸る雁の聲よそありけるれもへは去年十二月仙臺を出

てより家信もあらず我居所さたかならねば左もあるべき事ゐゐろ

年老て外國まもる春の夜の
ゆめかうつゝかかりかねの聲

十七日夕暮に兵站部郵便係りより書簡貳通配付せられたり取り上見れは家信なり甲は去年十二月中廣嶋に向けて發し乙は一月末朝鮮國に向けて發せしなり大東溝や岫巖大孤山なと回り數枚の附箋あり開き見れは宿元かはりなくいろ〳〵の事ともしるしぬ其奥に寄食書生の詩を吟するを聞て感しけるとて書添へたり「聞說黃花戍頻年不解兵可憐閨裡月偏照漢家營」如何ゐも唐代の婦女遠征良人をおもふ情緒なれと翌日返書に左の二首を書き送れり

閨の戸にてる月かけよ其まゝに
外國まもる幕のうちまて

片敷の閨と外國もる人と

千里へたてゝ月をなかめん

家郷の書信は三四ヶ月ゐて屆たり我軍は連勝連戰朝鮮清國と深く敵地に入り殊に海山へたつれはおくるゝは當然なり其に付てもおもひ出すは先達て海城の役に捕獲せし清兵當地を過きけり內一人右の股を銃丸にて打拔かれ膿汁流漓身体疲れ髮髮茫々たり創所手入なとして後に家國や年齡其外種々筆談せしに答云ふ今日俘虜となり日本ゐ占領せられたる舊國を通過し耻辱と病苦と幷せ至る何そ家眷ゐ及ふの暇あらんとて筆を投捨てけり杜工部詩に「國破山河在城春草木深感時花濺淚惜別鳥傷心烽火連三月家書抵萬金白頭搔更短渾欲不堪簪」と詠せしは當時の兵乱を歎したるなり今日は我　皇國と戰爭して敗劒せし事なれは敵人なから見るも憐を催せり其者の心のうちを推はかり代りてよめる

とらはれてやふれし國を過る身は

家路のたよりいかにれもはむ

土城子は山間の僻村なるも稍要路なり其地三方の道路あり東龍王廟を經て安東縣朝鮮に至り西北溝連河を經て岫巖海城に至り西南大孤山を經て大連灣金州に至り各地共高低出沒にして大小河流數條あり然るに滿州は殊に寒帶地方なれは河流は早くも氷結して徒歩自由なり故に人民橋梁の設けをなさず曩に我軍隊の進行するも都て大小河流を徒行せり是は内地と違へて便利なり兵站司令官藤井大尉早くも考ふる所あり逐日温暖の時氣となりなは氷解して軍隊及軍器其他の運搬極めて不便なりと土人を使役して三月上旬工事を起し十日間に大小橋十數餘を架造せり其最重なるは東方龍王廟に至る五道溝村に架するなり河は即ち大洋河にして下流は大孤山に至り河幅三十三間橋の幅九尺長徑三十七間とす其前後に小橋五間及八間なるもの四個を架す橋頭に告諭標を立つ

五道橋示諭

五道橋者村民奉兵站部之命搆築者也渡橋者須知橋德橋德即是大日本
皇帝陛下仁慈之賜也

渡橋者當嚴守次條項也

一橋邊遭遇於日本軍隊則可必讓先於軍隊也

二遇於軍需運搬之車輛則他車可必讓先也

三惡意破橋者必處軍律

四過誤壞者須告情於村民以加修理也

五橋邊不許車馬之休憩

明治廿八年三月

土城子兵站司令部

是よりして軍隊及人民の通行頗る便宜なり扨此お憂ふへきは此橋を架する場所たる渺々たる平遠原野の中心なり聞說霖雨の際河水汎漲して湖海の如しとそ滿州地方は都て王化に浴するゆとそしく河流に

對す堤防等の設なし隨而田圃の繁殖不充分なり尤水田に適當なるへき場所唯陸圃とし黍稗粟等の雜穀及陸稻なとを種育するのみ此故に司令官の熱心に架造せし橋梁夏秋の交或は破壞するあらんとす他日全たく我版圖となりしならは大に計畫する活眼者あらん今此に述るのみならす先達てより過る所の村落往々是に類するもの多し實よ惜むべき事にゐそあれ我此橋を過きつるは恰も好し三月二十一日にて春分日にそありける

心なきわらへをみなもつはものに
たつさいられていたる彼岸
彼岸にわたす佛のふねよりも
尊とかりけり君の恵みは

近日一層春候を催しけれは歸村せる人民共徐々と農事に就くを見る去りなから乱後の事なれは家屋は破壞し器具も亦散逃して稼業不充

分なり中等以上の人民は牛馬及耕車を所持す幸にも我軍の運搬使役に應して夫々賃錢を受け家計補加の法方立たり是亦少からさる事にて土城子より龍王廟に至る六里程五頭牛馬車壹輛五圓以上七圓溝連河に至る四里半四圓以上六圓大孤山ゐ至る四里半四圓以上五圓と兵站部にて定められ此日數も幾多を重ねけり細民に至りては單身使役或は僅かの賣物等にはんそふせり諺に七年の凶歉に逢ふとも一年の軍に逢ふなかれとも能くも云ひたり古書に「百姓足則君與誰不足百姓不足則君與誰足」何とそ早く鎮靜して人民其地に安んー其業を勉めさせ新版圖をして我王化に浴せしめ仁德帝の御製のふとくせまはーくれもへり

あたらーくなつきし民も年月を
すきなは太きけふりたつらむ

遞信省官吏某嬢に清國にありて聞得たる北支那地方の俚歌なりとて

示されたり其は冬至より春季に至る順序の大略なり曰(頭九二九不出レ手三九四九凍老狗五九六九沿岸見柳七九河開八九雁來九九加一遍地レ耕牛走)之を註釋すれは九の字は毎九日にして算數の九九にあらす先つ冬至入りても直に寒氣は至らすはーめの九日頃より十九二十九日頃に寒氣強くなり手を袖に入れて出す能はず此地方に手袋等なし我隊の毛布や毛糸織の手袋を見てうらやむこと甚し二十九日は陽暦一月十七八日にあたれり三十九四十九日は大寒より寒餘即ち二月はしめにあたり寒氣尤も酷烈なり老たる犬は凍え死ぬ程なりと五十九六十九日は二月末三月はしめに當る寒さも少しくゆるみ楊柳の芽を催すなり七十九八十九日は三月中旬に當る温暖となり河畔氷開雲邊雁來なり九九一を加ふるは三月三十日に當る冬至入より一百日にして所謂遍地耕牛走なり土城子及近村は此歌より少しく後るゝを覺ゆ殊に柳は芽を出すよりとくにして出さす河開雁來は全く當れり我奥州地

方と大同小異なり此歌林園月令(越後新潟柳灣館著)に引用せし田家五行の文と相似たり

牛馬のちからによりて春秋の
田面の業をはけむむら人

我舊藩士國分高胤なんぬ早く清國に來りて安東縣民政廳に奉職せり其地方に三寒四温と云ふ俗語あり其は寒冷三日續けば其次四日間は温暖なり定期となしかたけれど稍其意味ありと告けられし都て寒暖氣候は人身生養動植繁殖に關する要件なれはしるしてもて他日の經驗に備ふ

清國に入りてより經過する所平遠は多分耕圃となるも山々に至りては樹木少なく兀々たり大小の岡丘また茫々たる原野と同し其中には幾分か發生するも至て幼稚なり松米赤楊木など所々に見ゆ土地概ね磽确なり去りなから樹木に適せさるにあらずして伐取の頻繁なるに

まるならん[史記列傳曰居之一歲種之以穀十歲樹之以木百歲來之以德]若し此地をして我國内にあらしめは蓊鬱たる森林を造出すべし聞說齋藤歩兵少尉は越後の人にて曾て農商務省に奉職し山林の事を擔當せしとそ今般召集に應し仙臺以來同行せり然るに聯隊旗手の職なれは朝鮮國義州にあり定めし見聞記事もあるならん願はくは我と同所に在りて朝夕談話し輝譏を交換するならは愉快なるべきに惜しき事と思ふ[illegible]樹を[illegible]せ謀る山を[illegible]むなしき野邊と捨る村人[illegible]

二十六日熊澤歩兵大尉(安定)來る同氏と我と明治のはじめ東北鎭臺を青葉城に設置されたる時より俱に兵馬の役に奔走せし僚友なり去年の秋渡韓して展戰地を經過す尋て清國鳳凰城に屯在し今日また海城に前進する途次當地に宿泊す余就て相見る途上の吟詠を示さる曰千

村萬落角壁寒到處山川白骨殘半歲露營皮肉瘦乾神唯剩義忠肝余亦近作の和歌數首を示す同氏曰老人何そ詩を賦するを以て清人を學ふと云や請看米國曾て英國の羈絆たり一朝紛議を生し戰爭せり大提の後獨立して文學は獨英による想ふに今日詩も賦し歌も詠し然して胸襟を披くべしと善說君言也我將和芳韻筆を把り記して曰[illegible]野春深猶覺寒誰知茅屋養衰殘偶逢舊友呼杯酒一夕清談洗肺肝同氏從來惡客たり茶菓を食はる甚十余敢て管せすしきりに杯をかたむけ情思綿々尽るを知らす三更に至り別れ去りぬ

二十七日余[illegible]第八章[illegible]

[illegible]第八章[illegible]

三十七日余岫岩第二大隊本部勤務を命せらる看護長鈴木源一郎を主城子に殘し三十八日午前七時兵卒小泉嘉吉馬卒遠藤太藏引連れ出發せり雨後の泥濘馬脚を沒し殊に險岨なる山坂を右左と迂回する幾回

なるをしらす正午近き頃連河に至る午飯を喫す是より前路は少しく平坦なるも洋河の南北両岸を千とり掛にわたり行く事實に煩はしき程なり午後四時柏家店兵站支部に着す野村大尉其他お面會し久々にて酒酌みかはし四方山の談話にれもはす旅のつかれを忘れて打臥ぬ二十九日午後七時半諸氏に別れを告け出發す相變らす洋河を數回わたりて正午お土門子嶺に至る

山間の九十九折なる道過て

もゝたひあまりわたる谷河

午飯を喫して後同所を發し二三の山坂を越ゆ廣き平野に出つれは遥かに岫巖を見る畦圃の間をたとりふゝて午後三時到着す兵站部に至り井上少佐山口副官木内計官其他の人々に面會し談話に時を移せり少佐告けて云ふ當地定立病院引揚に付て傭醫速水貫忠看護手貳名殘留せしめ同院を患者集合所と改稱す萬事問合すへくとそ其より同所

お至り諸氏に面會す天室貳名おり毎朝外來患者兵卒拾五六名其外軍夫及清人貳拾名前後なりと談話の後室内を巡視す昏暮となりけれは宿泊す

三十日午前十時大隊本部お至り井上少佐に面會し土城子にて既お床虫發生せるよりより各中隊蝨防及療法を施行せし事なと申述へ次に第二中隊看護手和賀吉次を呼寄せ調劑致させ度旨申述たり

夫より岫巖を一見せんとて通譯官(朝鮮人金氏)の案内によりて散歩す此地は往古愛新覺羅氏の創業にして後に奉天府を開きたりと云ふ近來まで岫巖廳を置きしに光緒二年改めて岫巖州となし鳳凰廳の所屬となる人家大約二千五百戸地形南北に長く東西は短かき方形廓なり南入口堡壘樓門あり煉瓦石と石との間に横に文昌閣と彫刻す樓上韋駄天の像あり北出口の門を大通門と稱す同しく堡壘を以てせり南北線の市街を大通となす中央に城あり四百米突の正方形にして悉皆堡

壘なり基脚に於て八九米突高さ十二三米突もあらん上面二米突毎に射眼を造り内部に蹲居する所を設く遠望すれは鋸齒の如し東西二門を開く東を旭昇門南を阜昌門と稱す上に樓臺を造るも清兵遁走の際自から破却せり城内に官衙數棟あり第一は九旗衙門清國兵制旗を以て分列せり元是明代の制にて兵士は都て旗を脊負ふなり這般の戰爭にも往々旗を用ひたるを以て知るべし故に兵士を旗人と云ふ聞說明にも黃白紅綠の四色旗なりしを清に至りて其旗に輪廓線を附して八旗となし正廂の二稱を用ゆ廂は副の意味なり即ち正黃旗廂黃旗正白旗廂白旗正紅旗廂紅旗正綠旗廂綠旗とす八旗共中央に龍を畫くなり別に巴兒虎と稱する驍雄者を組織したる隊を增加す其旗の中央にも虎を畫くなり此旗兵は都て重なる都府に五百名以上一千名二千名を配置す我師團兵の通常備兵と同し第二は城守尉衙門壹棟是は旗兵の中より多少の兵を分派して守衛するなり第三は州衙門壹棟是は舳嚴

廳を州と改革せると同時に設置せるものにして州の全部を統治する官衙なり第四は巡檢衙門壹棟是は市街及州を巡察して非常を警しむ我警察署と同し城外にも亦訓導衙門稅務司衙門の二官衙ありと此等の諸官衙我兵の攻擊に堪へすして遁走し空屋となり今日は兵站部倉庫或は病室或は兵舍等に使用せり此空屋内に清兵の棄去りし鎧兜の破壞せる物數多散布せり尤も多きは弓矢なり清國も今日は銃器を使用せる故に先は廢物となれり我兵は此の弓矢を焚物とーてかしき及ひ防寒の資となしたり其焚捨の箭鏃幾百個となく室の隅や庭の前に掃き寄せありたり

再說此地方は寒國なる故に竹に乏し弓矢とも都て木にて造れり其質は多分柳の樣に見えたり余他日歸朝後紀念にもとれもひ古弓一張古矢四五本ひろひ置きたり大孤山上船の際或將校告けて云ふ敵國の武器はたとへ廢物なりとも携帶するはよろしからすと因て箭

鏃五六個を殘し弓矢は宿舍に捨去りたり

西北に寺院あり老爺廟と稱す前門正殿共に佛像四個を安置す南門の左右の人家は石工にて即是岫巖石を以て茶碗酒杯文鎭印材烟管腕輪指輪等望によりて數種を形成する所なり余親しく就て見るに石を磨き研ぎする業なれは隨分氣長の事なり日本人なとは中々出來得へからさるやうにれもはれたり古人斧を研きて鍼に造りし諭言も粗相似たり

れこだらすつとむるわざのしるしとて

みさきのいはほ國となりぬる

三十一日前日同樣巡視せり旭昇門外なる南北線の市街には毎日路上に市店を設け両側の商店と相爭て營業す先は盛なるに似たり兵站司令部は東側商人張寶魁の家屋に設置せり其南方に稅務司衙門あり又其傍に財神廟あり相併せて野戰郵便局となれり更に南方百米突はか

りにして西方に路あり大厦數棟を見る即是訓導衙門なり今日は岫民政廳を設置す前門展額岫巖廳儒學と記す門扉に文官の服裝を着けたる畫像二体あり通常人家は貧富高卑に論なく門扉にかならず嚴格なる武人戈を持するを畫けり以て異なる所なり正室は民政廳事務所となる舊文學講義所なり家屋構造は一般民家と同樣にて寬きのみ左の室は習字所にてもあらんか別に前門を設け大寫書院と記せし額を展揭す右の方に聖堂を設置す頗る宏壯なり其結搆は道路ゐ對する所高き粉壁墻を築く左右の側面より出入す右を禮門と云ふ小額あり門の前に石標を立て「聖旨文武官員軍民人等至此下馬」光緒三年二月穀旦」左を義路と云ふ共に小なる圓形のくぐり門なり之を入れは直ゐ前門にして櫺星門と云ふ大額を展揭す門内ゐ池泉ありて圓形石橋を架す邊岸悉皆疊石なるも池水は乾涸せり左右に小殿あり近代の儒生及義人節婦數拾人の姓名を記るす本殿前額大成殿とす正面中央に至聖先

師孔子の神位と記せる木牌を安置す其上に「斯文在茲」大字の扁額あり
左右に顔淵子思孟子及七十弟子の神位を序列す末席に韓愈朱熹の神
位あり[illegible]

[illegible]あらたまをきりみがきする山里は[illegible]

[illegible]ひしりのみちもひらけぬるかな

四月廿一日午後三時和賀吉治到着す翌三日備醫速水寳忠及看護手と與
に公用及患者其他の引繼を成したり患者集合所を後備歩兵第三聯隊
第二大隊醫務室と改稱す其家屋は舊定立病院の本部にして城南門の
南二百米突餘の西側なり翌三日全く醫務に就きたり此日神武天皇祭
日なり回顧すれは去年十二月仙臺を發してより前後五ヶ月となりけ
れとも身体健全にして床虫たにも冒かされす是ひとへに神靈の加護
なるべし出發の際親族の老婆より太神宮聖天彌陀佛等の守護札を一
と纒め入れたる掛袋を贈らる是を半蔀の上に捧けて禮拜し醫務室開

設の心祝をなしけり[illegible]千早振神の御守護を帶ふる身は[illegible]
[illegible]恙ゝがのむもなとかをそはむ[illegible]
毎日診斷の患者も隊兵及ひ軍夫人員總數に對して少なし畢竟温暖の
好時節となりたる故ならん午後は市街を散歩す歸路南門内の石細工
師に立寄見るに隊兵及其他の人々居催促の注文夥多にして買得る事
もなりかたし岫巖石の珍重せらるゝ實に甚し此地一名秀岩とも記せ
り愚案に玉石の工業盛んにして世ふ秀名なりとて好事家の殊更稱し
たるならんか[illegible]

[illegible]玉つくるたくみのわざのなかりせは[illegible]
[illegible]秀つる岩の名をもしられも[illegible]
九日の夕暮東方の山に月出てたり風もなくしてたやかなり酒くみ
なから几ほ憑りて考ふれは東京の上野飛鳥山は既に櫻も滿開或飛花

となりたるならん又新聞にて見るに休戰後講和談判頗る好結果の景況ありと願はくは早く吉報を得て外征の我々內地の數千萬人共に祝杯を擧たき事とれもへり幸に一昨日當地の畫師吳喜亭老人より「桃花楊柳弄青春」の畫を贈られ壁上に貼付せり時に月影は徐々と上りて窓越しに映し我獨酌を助けたり李白の春夜宴桃李園序にならひてよめる

月花の下にむしろをしきつらね
さかつきとばす春をゐそまて

四月二十日東街の寺院に演劇ありとて或人に誘導せらる休戰再度に及ひたる場合殊に其伎者は奉天府山海關よりきたり舶來人と合併のよし一見せんとて至りぬ寺は市街の東横町にて道路に面したる所に高樓を造る左右ゐ鐘樓鼓樓を架し其間を通行となす樓臺の內面即舞蹈場にして正殿に對したる擔端に展額あり「響遏行雲」樓內梁下の展額

「薰風解慍」と記あす既に演劇は始まりたり伎者は十二三歲より十五六歲と見ゆ頗る美服を着け男女とも顏面に脂粉を粧ふ外題は何なるかしらねとも聞く所によれは勸善懲惡に外ならすと其樣一諸侯の妃嬪を擁して溺酒に耽る所に侍臣來て諫めんとす侯臣に遠さけられ慨歎の景況なり次幕は軍兵のたそへ來りて侯及妃等を生擒し遂に屠戮す其次は亡靈にてもあらんか同じすがたの美女二人出て種々爭ひ語る一老人來りて撿分す孰れも判然ならぬ景況此際陰火をもやす事二三度あり我國の二人れくみの芝居に似たり其次には又も大合戰となり大詰に至りて清國各寺院に安置せる諸佛の高卑列坐する所を示せり中央に一少年をして裸体直立せしめ天上天下に左右の手を指したり即ち釋尊誕生の所を象とりしものならん其周回に曩に合戰せし武者共を主王ゐ體四天王に擬じ婦女を相併せて環立せしむ言語通せしならは隨分面白き事ならむ清人此を唱戲と稱す亦文戲武戲に分つと云

ふ今日の所にては子供の唱戯にして混合なりと見えたり此ゐ於て西洋人我國の演戯を見る事なと思ひ出されたり此日我兵卒軍夫及清人老少男女數多見物せり夫より正殿に至る中央高き所に大王椅子に憑る双方に小童侍立す上に赤帝司權の大額を掲く此寺を火神廟と稱す如何にも大王の顔面は火の燃る如く赤し左右の壁に天后の大合戰實に奇々怪々乱軍殺生無算の景況を畫けり其前に大なる武者貳人の像戈を携て直立す

よしあしの二道わけて舞ふ場に
かゝる佛もあらはれにけり
と國のたはふれうたと云ひなから
ゆかーきふしもあれはありけり

第九章

清人の陶器にかすかひの如き鐵及銅の細條片を附して其破裂を留むるは曩に大東溝ゐても見たりしに岫岩にては最多く見受けたり兵站司令部の前に据置きー水瓶(五六斗入)に七十八ヶ所かすかひを附着せり愚按に此修補の價にて新たに水瓶を買得べーと問ふ答て云ふ全く始より斯くせしにはあらす拾個或貳拾個を付着して使用せしも亦破裂せー故第二の補助をなし第三となりたるならんとそ其他茶碗水差等破裂の恐れあれば早くも此法を行ふ器物の美なるには眞鍮或は銀を以てす即我國の燒繼法と同し功用にーて然して立所ゑ辨す且つ精巧に造れり余一日其職工の家に就て親しく實見するにかすかひを打たんとする部に錐にて小孔を穿つなり其錐をとりて見るに錐尖に金剛石の小片を附せり恰も硝子板刀と同し如何にも感服せり小孔にかすかひを貼すると共に白き粉を塡充す何そと問ふ石灰なりと云ふ都て器物の外面に施行して内面には毫も及ぼさす又鐵の鍋釜にも行ふ

なり是は轆轤錐の尖頭ゐ鋼鍼を附着し內外貫通して兩頭釘とをす最確實なり其人の姓名を問ふ南門內姓徐名成文と云ふ其工事の名を拘子と稱す如何にも當れりれさへひくの意なり余熟考するに我國老人の中風症に罹りたるを陶器の破裂に比して彼は最早ひゝきか來たるといふ重症は即時絕命に至るも幾分か輕きは療法と養生との宜しきを得れば五年若しくは七年の餘齡を保つなり此職工も亦吾黨に似たる者ならんか[illegible]れいやみをやしなふわさはまなひ〜も[illegible]うつはまてとはれもはさりけり

此國婦女の耳輪指輪腕輪を粧ほふは必要なるに似たり殊に耳輪を第一とす多分玉石を以て環に造り細き銅線にて耳朶に貫ぬき掛るなり少女は銀の華形なと數種あり指腕輪に至りては玉石は通常なるも上等婦女は金銀を以て管ゐ造り腕を回らし合口を錠前にして取り外つ

しを自由にす文字或は唐草等を彫刻して美麗なり富豪者は數十金を擲て裝飾に誇れり此風習は何の時代より始まりしと問ふ唯往古よりとはかりにて分明ならす余考に央記漢東方朔傳迺下殿去簪珥註曰珠玉飾耳者也)此を以て見れは往古はいさしらす先つ漢代ゐは上下共ゐわりしなり又唐張籍詩銅柱南邊毒草春行人何日到金鱗玉環穿耳誰家女自抱琵琶迎海神即是耳環を賞用する證なり歐州婦人も亦賞用す然し腕輪は見受けす我國に於ては耳輪腕輪たに蠻女の樣とて忌み嫌ふ事とす扨三環の粧飾たる清國婦女の必要物にして新婦を娶とるに贈物(日本の結納)六種あり曰紅布一對綠布一對銀鉗一對(耳輪)銀鐲一對(腕輪)銀華一對(銀造花簪)絨華一對(毛編花簪)とす貧富によりて品格に等差あり此外穀肉酒數品を添ふ更ゐ金三十兩より五百兩一千兩迄贈るとそ婚禮に就て一奇事あり婚儀の日新郎たる者新婦の家に至る其粧飾は頭に圓き笠を戴たき美麗なる衣裳の上ゐ紅布綠布三條を左右の肩

より胸部に交叉して垂れ背部も同樣にして胸部腰部に横に帶樣の布を纏ひて固定す前後の布端は垂れて脛に至る然して小童四人に小旗(壹尺四五寸方)を持たせ新郎の前後にしたがふなり其外笛鉦(ら)篳篥等の音樂にて來る新婦の親戚むかへ入れ此にて酒宴を開き暫時にして新郎新婦相携さひて行く彼贈られたる耳指腕の三環を使用して榮譽となす余初め新郎の來るを見て我國のにはかたとりや物もらへなるかとれもへたりしに花婿なりと聞きて腹をかゝえて笑ひたり馬鹿らしき風俗なるかな

耳うてにうかつたまきのよそはひは
やまとれうなは眞似たにもせず

婦女の足を小さくつくるは此國古來の弊風なり世界の七不思議と唱へらる如何にも無理ならす大概足の長さ三寸より四寸に至る指尖を尖形とす横は二寸五分より三寸なり然して綿布にてかたくしばり容

易に解かす是に靴をうかつ故に歩行蹣跚たり石壇など登るには人に扶けらる全身支柱の用に苦しむなり中等婦人は多分馬車にて往來す此地農作は都て牛馬耕なるを以て馬車一二臺所持せさる者なし貧人に至りては馬車もなけれは婦女の足自然普通より大なる傾きなり余婦女の足を一見せんと心掛けるも中々望み果さゝりしか岫巖の一婦女張氏鳳洋なる者關節慢性傻麻質私にて右脚疼痛して治療を乞來れり直に内服及ひ外用藥を塗布す上部より脛骨足部に至り布を取り去らしめたり其足の形たる先つ大趾は少しく足跛に向て屈みたり其上に次趾を載せ第三趾は直に大趾の側に密着せしむ第四趾を第三趾の上に載す第五小趾を第三趾の側に密着せしむる第三のみとし故に第二第四の趾は有れとも無きかことく扁平となり三個趾の上に固着して自から尖頭足形となし更に靴にて固定して發育を防き長大せさらしむ此成形法たる女兒十二三歳よりはしむ然して尤わわれむべきは

足關節部に於て瀉血し足趾の血行を減損して發育を防くなり北京天津地方殊に小足を尊むと聞く此地方も稍習ふかゐとし此より北部奉天府及ひ吉林地方に至りては漸々小足方も薄すらきの景況なりとそ畢竟起居動作不充分にて酷寒地方歩行困難なと感せ一ならんか

生立の女の兒の足にまかせなは
あゆみのほともやすかるへきに

陸軍通譯官三谷末治郎記聞

考山海經北荒有鏤耳之國近來婦女以此爲飾者益取其兩耳勻平圓對禮記云首容止釋不傾側也綴以双環或亦戒其首容節其傾以使其勻平也山海經節有鏤耳之國也自清初太祖定鼎以來君明臣良嚴降變制之例諸將無不從風而向化惟獨山東不隨矯旨而抗命特聘臺閣諸明官至京廷議皆以元順帝入之中華時制服粧飾均遵古式以對況帝臨祭亦必縮鼬而淸太祖力破其格山東始準薙髮還討三不從之諭男從女不從婚從喪不從民從

旗不從故山東女仍裹小足喪遵古制仍爲民人而定甲社不分旗佐也

若裹足之風乃始於五代陳之東昏王時潘妃進寵昏王剪金葉作蓮花鋪形瓔珞而貼於地令潘妃行於土昏王喜曰步步生蓮花也故女足曰金蓮且女主靜不宜動裹足以戒其奔馳也後世男子淫佚者即以此而飾美婦人以取悅也舍其本意以從末也

詩云裏如充耳是古之人有充耳之玉況禮記云婦女居壺中外言不入於耳今之以環綴耳者取此義也今以爲美飾者大非本義也

今春來惡疫病の諸方に流行し殊に海外出征の軍隊にも相發し其豫防法注意致候樣石黑長官閣下より訓示あり余熱嚴到着の後勘考するよ指向き病者發生の節は暫時の避病院なかるへからす何れの地宜しかるへきと探索するに先つ觸嚴を去る一千米突餘西南に方り一寺院の山に據りて建立せるを聞知す一日往きて點檢せり松雲寺と云ふ大約二十米突はかりの山をうしろとなし西南に向きたる位置なり正殿は

天后慈母堂にて幅七八間奥行四五間なり天后及諸佛六七体安置す其前左右ゐ室あり面積稍正殿に同じ内空にして土間なり是そ患者を容るゝに適當とし寺僧に逢て諸事筆談依頼す次に清國僧侶の頭部は我國の如く圓頂ゐして豚尾髪ならす是は一般なるか又各自の適宜なるかと問ふ一般に圓頂なりと答ふ然して前頭に六個或は八個の小瘢痕あるは何故なるやと問ふ是は佛法學業の一るしとして始めは左右二點次に四點六點八點と漸々學業昇騰に隨て印證するなりと恰も我國の灸點痕に似たり實に奇なる事を施行すと云ふへし

圓かなる頭尊とく見ゆれども

まなひのあとゝきくそあやしき

既にして辞し去らんとす音樂の聲遠く聞ゆ何そと問ふ葬式なりと暫時に寺前の墓地に來りぬ余是を見るに柩は前にも記する舟形にして外覆を白布にて造れり十六人にて曳き來れり喪主と見へて淺黄無地

の衣服を着し頭はは帽の前より後に白色紙をまとふ婦女は白綿布を冠り顔を掩ひ號泣す會葬者も亦愁色或は號泣するあり柩の前に菓子菓實及ひ造花數種を供ふ又傍に白馬壹疋(紙製にて尋常の馬の大さ)率きたり是はかならず供ふとう線香を焚く事尤甚たし寺僧來りて讀經する始終香を焚き音樂を奏して儀式終るや菓物等小兒なとに與へ其器物紙花白馬等悉皆燒捨てゝ柩のみ殘し更に香を焚き音樂を奏す數十分にして去る然して葬事と土葬に限るも甚はた不同なり早きは三四週間或は百日程遲きは一週年或は二週年に至る地方により小異同あると云ふ既に葬たるを見るに柩を置たる儘にして四方より土を蓋ふなり其上に石塔或と木標を立つ故に墓地は悉皆小さき山を造りならへたるかゐとし且又青草茫々たるも敢て掃はす

當醫務室は厨夫五名とす(定立病院にては八名なりと)然るに近來軍夫減少せりとて兵站部に引揚けられ唯壹名を殘さる我々の外に入室患

者もあり如何とも手廻り兼るより一考按を以て土人の貧者に當室殘餘飯を投與するを給料とーて二名を呼入たり是にて先づ庖厨用を辨せり早くも此事傳聞せる貧人來りて殘餘飯を乞ふ初め二三名なりしか追々婦女も來り早朝門前に立て飯々多謝と呼ひ叫ふ更に朝鮮人來りて憐みを乞ふ是は春來運搬出かせきとして來りしも近日使用緩慢となり自然糊口に苦ーむにいるとそ此に至りて彼雇入たる厨夫の受る殘飯幾分か減少するにより一朝双方爭論を生し恰も餓鬼道地獄の如し依て慇然なから施行を廢ーたり全体清人は貧富懸隔する事著ーるし貧者は旦夕さへ難き程なるも富人は數十萬の儲蓄あり岫岩おてすら我知る所の燒酒店張寶魁及豪農干成金なとは百萬圓に近き財産なりとそ扨此貧人乞食の景況は我國三四十年前往々見たるおとも ありけり

朝な夕な門につとへるおつじきは

うへたるれおのむれかとそみる

清人の阿片烟を喫するは噂に聞たるよりも甚たし余曩に大東溝土城子の守備中は人民逋逃して空屋のみ多く住居の景況詳悉せさりしか此地に來り熟察するに貧富を論せす喫するなり尤貧人は阿片烟店に就て喫す烟店なるものは我國の居酒屋に似たり擔前招標を掛け記するに「上海發賣原醬清水洋烟」「洋煙」とは英商の印度より輸入するを云ふならん朱字或金字に形容せり其烟管は徑壹寸餘長さ壹尺五寸餘の竹管にて阿片を容るゝ所は管頭より三四寸の上部にあり小燈を盆上に置き其火上に阿片を臨ませ撚燒し管口より吸なり一吸の價拾錢已上を要す吸後睡眠する故に枕を三ッ四ッ設置けり來客悠然と眠に着き ぬ中人己上は自宅にて喫す阿片烟を吸兼ぬるは貧者とーて賤しむる有樣なり少しく文字を知る者は阿片の生活に害なるを知るも今更廢止すべきやうなとと云ふ歎かはしき習慣なる哉此烟店は岫岩中大約

壹百戸以上もあるべく思はれぬ尤横街裏街等に多し大通街には少なし是は自己十分に吸得れはなり余此事に就て民政廳長官神戸歩兵少佐(守正)に談話して是非とも平定後と阿片烟を排斥すべしと主張せり傍に在し通譯官三谷末治郎(香川縣人)曰到底防き難し是を防かんとせは阿片輸入に頗る多額の賦税を課し其價を高めて自然購求に苦しむ程に至らしめ竟に減少すべし是政府と人民と一擧兩得の策ならんと或は左樣の事もあるならんか記るして以て他日を待つ

一吸のけふりにをひてうたゝねの
ゆめをむさはるならはしそ憂き

五月二日當地北端大通門外に死刑執行せらるとて民政廳より通知ありけれは出場せり午後一時民政廳長官神戸歩兵少佐及屬官數名兵站司令官山内砲兵中佐(定矩)憲兵等列場す罪人三名を引出して罪狀書讀聽せ死刑を宣告す憲兵及巡査に刀を執らしむ其斬首するや首は四五尺前に飛ひ左右頸動脉より出る血液は三四尺迸瀉して畫かけるゝとし此三名は强盜にて凶器を携さへ民家を强迫し金銀を掠奪せし者なり其姓名

强盜犯　小東溝裏大溝住　付國林　年三十
仝　二道阜子住　宮寶田　年三十三
仝　窪子塘住　夏財山　年六十六

余後備の身なれは彈丸雨飛殺傷無算なと云ふ場合には遭遇せさるも此劒光電閃鮮血淋漓するを再應見る亦愈快を覺ゆ

けふもまた見る罪人の頭部に
つるぎの光くれなゐの露

此日兵卒軍夫及清人等見物の群集する山のことー刑場は平地なれは容易に見えさる故我勝に先に出んとす爰に奇なる事あり或清人腰掛臺を五つ六つ持來りて後の方に置きたり日本人我れもゝと其上に

上れり然るに刑事終るや其者來りて壹人に金五錢つゝ申受けたしと云ふ馬鹿らしきなと云つるも現在其用に立てし事なれはつぶやきなから投與しけり清人の時に臨て利を射る事の鋭ときは中々我人の遠く及さる所なり

日清兩國講和の事も數旬を經て五月八日愈批準交換結了せり內地及在外軍人共に祝意を表す當岫岩兵站司令官山內砲兵中佐會主となり廿八日佳宴を張る我聯隊は勿論民政廳將校まて招かれ下士卒には酒肴を贈らる又岫岩城內幷に市街に人物及花卉等の仮裝體をつくり出して諸人の觀覽に供し下士卒をして君々代の唱歌を三唱せしめ　天皇陛下萬歲を三呼す仮裝禮の內最も意匠の勝れたるは富士山の下に我伊藤總理大臣と清國李鴻章と握手の禮をなす所なり此富士山たる我國の名勝にして李鴻章の來て和を乞ふを表したるなり櫻花滿開を作り出すも亦同し其他兵卒の角力軍夫のにはかれとり等終日にきは

ひたり兩國大臣握手の仮裝體を賞賛して共首よめる

[illegible]きのふけふ世に弓矢うち捨て[illegible]

[illegible]潛[illegible]みかはす花の夕影[illegible]

[illegible]第十章[illegible]

六月九日第二師團歩兵第十六聯隊第三大隊の一部到着す翌十日我聯隊の守備勤務と交代す十二日我聯隊第一大隊の內第一第二中隊は營口に集合して歸朝の命を待ち第三第四中隊は兼て大孤山に在り是と同樣第二大隊第五大隊幷に聯隊本部兩大隊本部悉皆大孤山に集合して歸朝出發の命を待つの事となり十五日齋藤中尉と共に先發して設宿及び衛生施行を命せらる下士卒四十餘名を率ゐ未明に出發す土門子嶺あて兵站部に立寄り海道村落流行病有無問合せければ下利病者多るよし診察するに通常の腹加答兒なり午後二時溝連河に着

ず兵站部に問合するに是又異狀なし飲用水は河流を用ゆと十六日早天出發す九時土城子着兵站部に問合するも異狀なし齋藤中尉と宿舍を設けんとす狹隘殊に不潔なる故に人夫廿名をして大掃除をなさしむ其あとには石炭酸水を撒布せしめ十七日早天發す午前九時大孤山着當所は兼て藤井大尉設宿擔任せーを以て諸事整頓す實は第五師團諸兵多數宿營の事聞及ひけれは如何と氣遣けるに意外の好都合にて夫々宿舍に入る岫岩出發後沿道耳目に觸る所を左に記載す盛京省の山嶽は青葉を催ふー河川は碧りをたゝよはせる好時節となりぬ一れもへは去年來我野戰隊は千軍萬馬砲烟彈雨の間を馳驅奔走せし土地なるに今や平和となり尋て還附の勅詔を下したまはる土人は知るや知らずや野外に牛馬などを放ち耕し耘きりつゝある古書の馬を華山の陽に歸し牛を桃林の野に放つと云ふも斯くやらん去りながら我等は占領當時の考按に戰爭も早晩鎭定すへし其節は第一に人民教育第二

に衛生施行尋て江河築堤山澤種藝なと種々意見のあるかきりは當路の人にもはなし會ひて見んとれもひしに實に意外の景況となれり歸國ののち語友人に何んとかたらふへくともれはえす唯々茫然として打過きぬ

血けふりの後はみとりの陰となり
　　ようしもろともいてふ村人

青葉山みとりのなかれそのかみは
　　くれなひけふりそひしものを

當地は過にし春のなかは來りて其所此所見巡りつれとも雪氷の節なれはくはしくもせさりけるにこたひは待命宿舍の事なれは一日岸和田大尉及ひ其他と共に聖水宮に登臨せんとす即ち大孤山天后宮より四百米突もあらん險峭なる石壇を右や左りとたとりふふて漸々至りぬ此所は山の半腹なる東西に三四十間南北に十五六間の平地にて美

麗なる堂宇五棟幷ひたゝ前に樓門あり又「別有洞天」の額を掲ぐ樓上に釣鐘を懸けたり堂宇あゝは藥師佛及び關帝なと安置す其うしろは懸崖高く聳へ大約四五丈中央陷沒して穴のことき所より清水流れ出て下に池泉を造りぬ「第一神泉」「雲深波潤」等の額を掲ぐ堂宇の前なる絶壁の土坡には高欄を造り諸來是お懸かり南天を望む近くは市街全部及ひ大洋河東南より西に向ひ更に彎曲して南方海に入る其間十洲三島遠く烟靄に埋もるること所謂神仙境界とは是なるへし左方に客室を設け登臨人の休憩所とす壁間聯語あり「千里眼中滄海小。一層樓上白雲多」其傍に堂守人住居す余老年殊に還付の土地なれはふたたひ來り遊ふ事を覺束なし實に名殘惜しくれはえゝ陸放翁蜀中詩に「延平窮寇非難禦。如此江山坐付人」と云へり彼三國の忠告放て拒絶しかたきにあらさるも熟考すれに他日意外に不利益なる事もあるへきか何れかしおきあたり深き御配慮のありつるなるかし土坡の下に豊碑二

面あり名勝賛美の文なり余もまた一首の歌を詠しける

雲深き岩根によりて三ッのーま

なかむる事のまたもあらなん

堂宇を僅に下りて東の方壹百米突許り更らに東に面したる巖石の間に大穴あり入口六七尺許り中間奥行七八間横四五間高さ二三丈餘と見ゆ四壁悉皆岩石ゐて小石片無數底面に散布す是れそ土俗の云ふ殷紂王妃姐巳金毛九尾の狐となり來り住たる所とそ小石片を取りて懷中すれは狐狸に訛らかさるゝ害なきとて到る人毎に携へ歸れり愚按に大孤の文字を好事家の大孤となして此の異說を唱ひ出せしならん熊澤氏先般步兵少佐に昇進し大孤山民政支部長命せられたり我聯隊の集合を聞き大に喜ふひ書簡を寄せて上田大尉山口中尉我張を招かる廿六日夕暮打連至る別室に宴を張り主客献酬襟を披きて談話す余曩に此地に來りしも匆卒にして見聞不充分なる所あり因て質問す第

一に魁星樓の事に及ぶ同氏も亦判然せず通譯官鈴木重嶽(熊本人)及清人唐昂を呼ひ聞けるに魁星爲神人也主文學事清國二月初三祭日而小學生及讀書生登此樓拜神卜好運焉蓋清國舉人制六年考一回選出三百六十名就中一名點狀元狀元者文官高級也解譯すれは清人文字ある者功名榮達を求め狀元なる高官に登らんとす此文學試驗は北京或天津にて執行すと六年に一回大試考おりて三百六十名を舉け其中の最良達なる者一名を狀元となす此の光榮を得んとて二月三日魁星神祭日に登りて禮拜し好運を卜するなり魁星は北斗星なりとそ又平常は地形方角を示す故に北を前として八方に造る前面には魁星樓と記する扁額あり左右の柱に對語「由來星宿昭天上從此人文蔚海隅」後面側面の楣上に横額あり「大魁天下」「筆點青雲」「文運應顯」等いつれも文科及第の意を記せり此樓臺たる通常人は燈明臺とおもへり

子思子曰喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和」我先達て歸朝集合

の命を蒙りて岫岩を發する時は早く歸りて內地の人々に歡迎せらるへく喜ふひいさみけるよ最早半月となりぬれと何の音信たも聞得す兎角船中に惡疫病發し易くそれ故運送船遲滯せるとの風唱なり忌まはしき事にうある扨老人の哀ーさは此短夜すら幾回となく夢も醒め數種雜多の事考かへ出せり去年來日清戰爭の起りと云ふは朝鮮國獨立の事なりしに既に批準交換結了して全き位置となりける此後は出來得る丈は補助の勞を取るへくれもひけるに如何なれはとて暗弱なる其政府は國体もさたかならす頻に內事の紛擾を生し近頃は或國の教唆なと受けらるとそ其無禮無作法憎むに堪へす所謂恩に報ゆるよ讐を以てせるなり又占領地の景況を見るに清人は嘗て我王化の慈仁整肅なるを拜戴し永久臣民たらんとして歸仰せしに今や還付と聞き大に失望し復たひ清國官吏の手にかゝり苛き憂目を見る事と歎き悲しむ者ありけり之に反して全き占領となりたる臺灣人はいまた王化

の有樣を知らさる哀さ軍隊に抗抵して騷きたる由れもへはゝ善き事はあしく樂しき事は哀しくなる浮世のならひと云ひなから是非もなー其むかし塞翁か賴もーと喜こひ愛せしまゝら男の子は馬より落ちて不具の廢人となり痛たく哀しみしも萬里長城の歩卒賦課を免れて却て安樂に世を送りしとあり又或人は薪を採らんと山野を馳せまはりしにとからすも大なる鹿を見認めて斃ーけるか去りとて自から携帶すへくもあらす又た人に知り得らるも如何と湟の傍に引寄せ芭蕉の葉數多とりて掩ひかくしたりける其夜は彼是安すき夢も結はす翌朝はやく人々相伴なひ至りけるにわさまーや誰人の持去りけるにや鹿の影たゝ見えすして唯々掩ひし草葉の取り乱されたるのみ何れ世界は活物なれは中和を全ふするは實に得難き事ならん

小男鹿のすかたは夢と消失て
殘る草葉の露そはかなき

廿九日占領地總督佐久間中將閣下巡回宿泊に付當所に滯在せる將校一同野外に出迎たり直に宿舍に伺候す閣下告て曰老人相變らす健康賀すへし且又征清の詠歌數首新聞上にて見るに頗る雅致にして軍中の逸興なりと仰せられける些少の文字斯くまで賞譽せられ却て恥入たり滯在一日間にて七月一日早朝發途となり將校一同ふたゝひ宿舍に伺候し見送る閣下云く諸君歸朝上船も遠からさるへし每船多少の疫病發すると聞く可成丈注意保護あるへしなとねんころに告けられたり

前章にも述る通ひ惡疫病流行は大連灣金州或は朝鮮國義州なとゝれもひしに過る廿四日には岫岩に發せしとて其地の守備隊附守住一等軍醫(信次)より報知ありしか程もなく廿九日我第一大隊輜重輜卒に發生し其より七月に至り每日續發して劇しきは七八時間に死去し緩なるは四五日を引もあり我等衛生員は晝夜奔走して救治及消毒に從事

するも中々沈靜の模樣なく十日ゐ至り四十名餘に及ふ其內死者二十名餘あり然るに運輸通信部より瀌船中越丸にて十五日に乘船歸朝の通知あり斯て其日になりぬれは聯隊本部第一大隊本部第三第四中隊共小蒸氣及ひ端艇十艘にて午後三時上船せんとす波戸場にて下利患者三名發す病院に送る其より乘り出して早きは六時遲きは九時或と翌十六日朝五時までに悉皆本船に着せり然るに端艇に二名の吐瀉病發す愍然なる事なから多人數の難儀には換かたく直に大孤山病院に戻しけり本船より是を見るに患者は端艇に臥居りしか兩三度頭をもたけて見送れり彼俊寛を鬼界島に殘ーたる昔語も斯くやとれもはれたり十六日午前八時大六天洋を拔錨せり此日天色晴朗にて大孤山其他海山を詠め歸朝航路の愈快なりとれもふ所に又も虎列刺病發生す取敢す船尾馬擊場に病室を設け療養せしに相尋て發し十七日十八日までに重症七名輕症八名となる陸地とちかへ船中狹隘の場合なれは

其困難云ふはかりなし出發に際して我老體なるを以て第二大隊附醫官右田三等軍醫を補助員として乘込ませらる猶又船中に亦十字社醫員小幡信忠及ひ看病人等ありて病者救護に盡力し寐食をも安んせす奔走せられけり彼是ーて朝鮮海も半は經過す此夜あまり疲勞をれはえたれは暫し眠に就きぬ曉近き頃夢覺めて船窓より海上を詠むるに燈明臺の光り明らかに照らせり船丁に何處と問けれは對州神崎なりとそ過しむかし萬延元年我舊藩士玉蟲左太夫日本大使新見豊前守に隨從して米國に至り使命を全ふし歸航の海上遠く日本の山を望み一詩を賦す曰「萬里波濤幾苦艱。何國今日得生還。夢乎不夢看初覺翠黛依然日本山。」をれもひ出されたり余はからすも去年來軍隊に隨從して唯今歸航す恰もよし此皇圖對馬の燈臺を見る亦玉蟲氏と同感なり然ーて其人既に地下に去り此實況を話する事を得す遺憾限りなー

西の海しつまりかへるわかつきの

寐覺に見るや日の本の山

明くれば十九日壹岐及ひ玄界洋を經て午後四時赤馬關に着きぬ直に彦島檢疫所病院に患者十五名を托し暫時休憩して扳錨す又々患者貳名發生す廿日三名同夜貳名前後七名となる廿一日午前十時漸く大坂櫻島に上陸す患者悉皆入院せしめ同夜休憩廿二日午後三時半梅田停車場より全隊滊車に乘ー廿四日午前十一時五分仙臺ゟ到着す大坂以東の沿道は勿論殊に仙臺停車場には留守師團將校軍醫部員其他の人々數多出迎ひられ烟火をと打揚け萬歳々々の祝聲中ゟ躑躅ヶ岡歩兵第四聯隊兵營の南舍に入りぬ

渡邊白關翁征清の役に從ひその首途せしより凱旋したるまての事柄を何くれとなく記したるを征清紀行となん名つけられたり即ち詩文は敵國なる支那の風なれは事を記し志を述ふるも本意ならすとて我御國ふりの文また歌ふて一篇を綴られぬ昔豊太閤朝鮮征伐の時或人漢文をよくする者をめされなはたよりよからんとすゝめたるに太閤色めきていなとよこたひのいくさは彼の國に我か國の文を用ゐさせん爲めなれはそれに及はすと答へたりしとかや實ゟ心地よき事にそある今翁か此書をものせられしも豊公とはなし心にやあらんといへはその一言をとゐるにいをむによしなく余か心のまゝをゐゝにかくはしるしぬ

明治廿八年十二月　雨香園主人成三

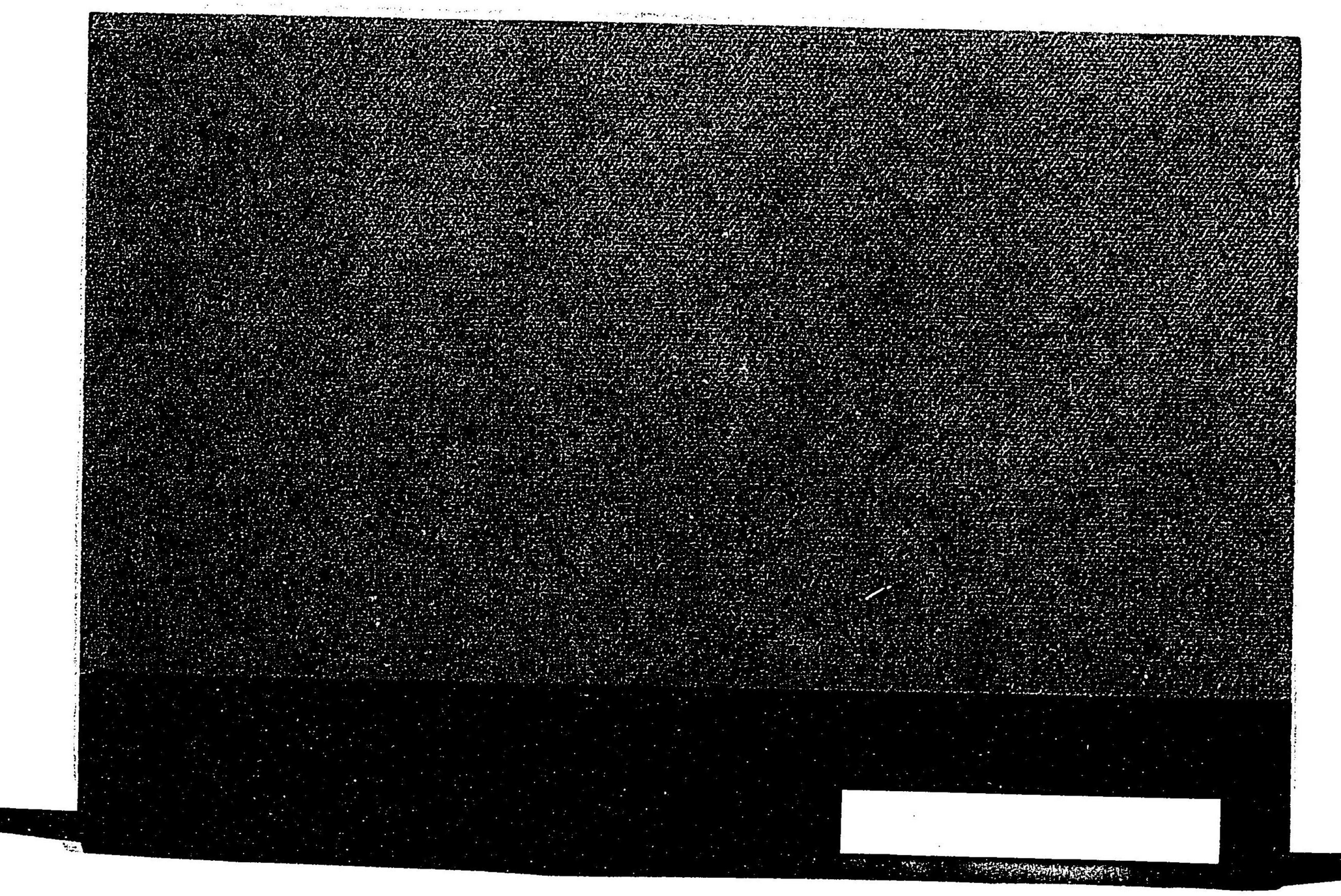
明治廿九年二月二日印刷
明治廿九年二月八日發行
（定價金拾貳錢）

著述人　宮城縣平民　渡邊重綱　仙臺市東一番丁四十四番地

發行人　宮城縣平民　橋本忠次郎　仙臺市定禪寺橋丁十五番地

印刷人　宮城縣士族　江馬耕太郎　仙臺市國分町六十一番地

賣捌所　宮城縣平民　伊勢安右衛門　仙臺市國分町百十四番地



特20
347

征清紀行

国立国会図書館

026574-000-1

特20-347

征清紀行

渡辺　重綱／著

M29

ADD-0253